

にし だ い せき
西田遺跡

—ワークマンプラス塩山店建設に伴う発掘調査報告書—

2022年9月

株式会社ワークマン
甲州市教育委員会
昭和測量株式会社

にし だ い せき
西田遺跡

—ワークマンプラス塩山店建設に伴う発掘調査報告書—

2022年9月

株式会社ワークマン
甲州市教育委員会
昭和測量株式会社

例 言

1. 本書は、山梨県甲州市塩山熊野字西田 100-1 に所在する西田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は店舗建設に伴う土木工事に先立つものであり、事業者である株式会社ワークマンの費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、株式会社ワークマン、甲州市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、甲州市教育委員会の指導の下、昭和測量株式会社が調査主体となり実施した。
[調査体制]
調 査 担 当 望月健太・藤巻浩太郎（以上、昭和測量株式会社文化財調査課）
調 査 顧 問 新津健（昭和測量株式会社文化財調査課 研究顧問）
発掘従事者 飯沼源治、加藤俊哉、内藤敏夫、中澤保、広瀬ありさ、三木一恵
整理従事者 齊藤里美、三木一恵
4. 発掘調査は令和 4 年 4 月 5 日から 5 月 10 日まで行った。整理報告書作成業務は令和 4 年 5 月 10 日から令和 4 年 9 月 30 日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真は望月健太・藤巻浩太郎が撮影し、遺物写真は望月健太が撮影した。
6. 本書の編集は望月健太が行った。執筆分担は以下の通りである。
第 1 章第 1 節：入江俊行（甲州市教育委員会生涯学習課 文化財担当）
その他の執筆は望月健太が行った。
7. 発掘調査における基準点測量および空中写真撮影は昭和測量株式会社測量課が行い、基準点測量を深沢洋樹・赤池直樹が、空中写真撮影を深沢洋樹・吉田奏司がそれぞれ担当した。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたり、次の機関および諸氏から御指導と御協力を賜った。深く感謝の意を表する。
日下部警察署塩山分署、コスモ建設株式会社、小林健二（順不同・敬称略）
9. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲州市教育委員会で保管している。

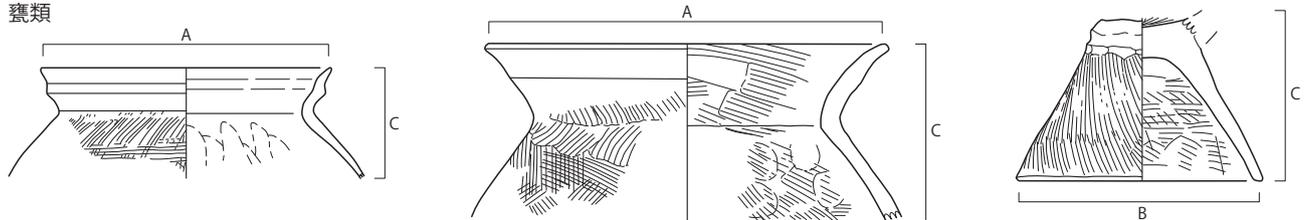
凡例

1. 本書では、国土交通省国土地理院発行の電子地形図 1/25,000 を用いた。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構平面図の X・Y 座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高 (T.P.) を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) に基づいた。
7. 発掘調査では以下の遺構記号を使用した。
 竪穴住居：S I 土坑：S K 小穴：S P 性格不明遺構：S X
8. 遺物番号は出土地点にかかわらず連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
9. 遺構平面図における一点鎖線は攪乱、破線は推定線である。
10. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。

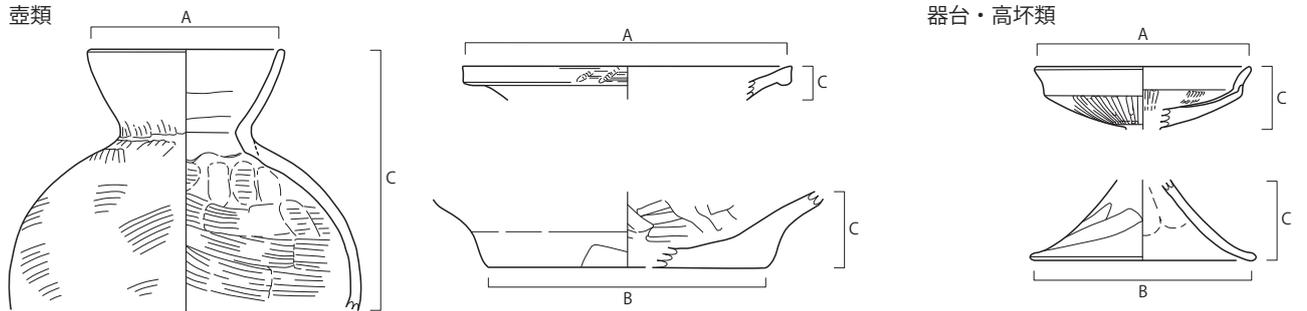
焼土範囲 (遺構図)  第3次調査区 (遺構図)  石器磨面 (遺物図)  炭化物範囲 (遺構図)  石断面 
 赤色塗彩 (遺物図)  (遺物図) 煤 (遺物図) 

11. 遺物観察表の法量の計測方法の凡例は以下の通りである。

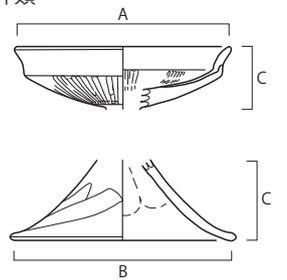
甕類



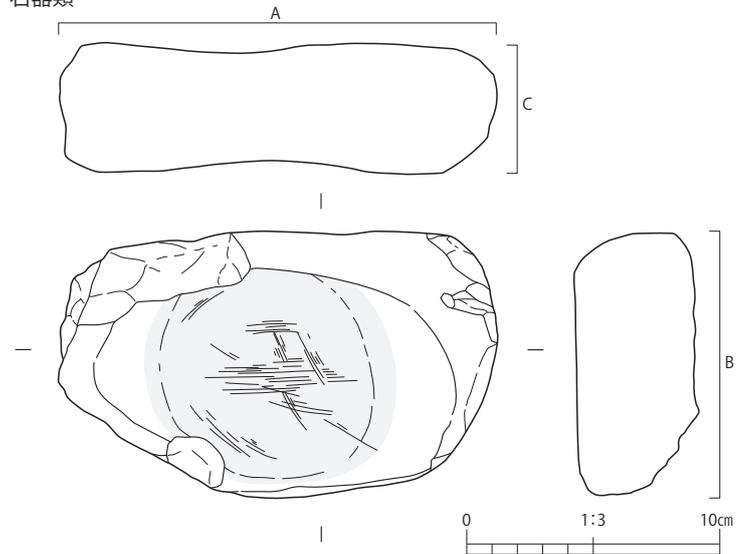
壺類



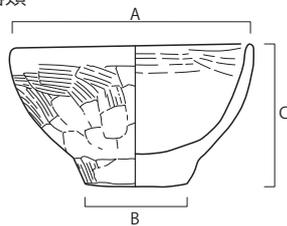
器台・高坏類



石器類



手捏ね土器類



破片類 (土師器・縄文土器)



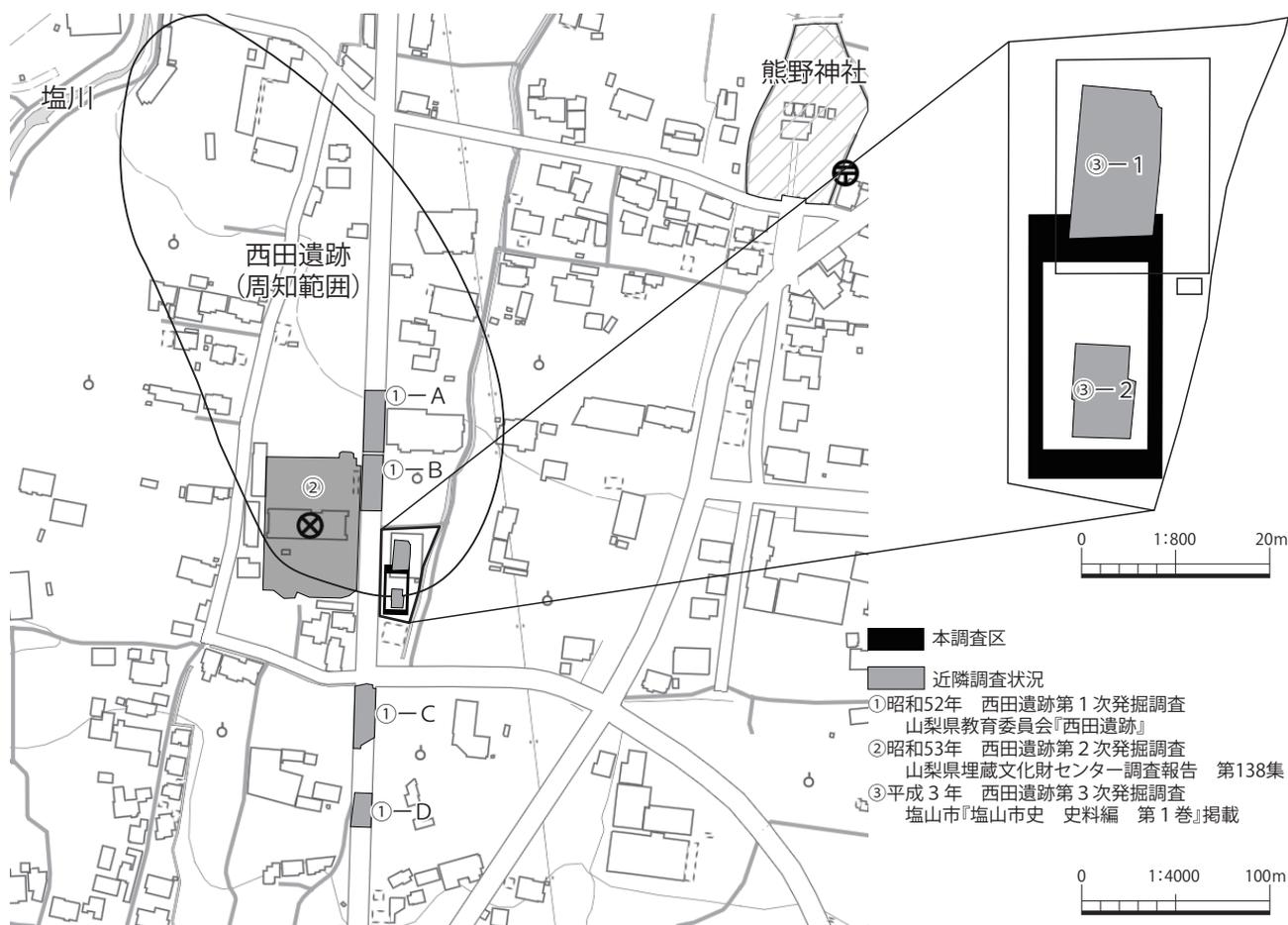
第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯 (第1図)

周知の埋蔵文化財包蔵地である西田遺跡内において、店舗の建設が計画され、開発に先立ち令和3年12月2日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出が、事業者より甲州市教育委員会へ提出され、令和3年12月15日付文化第3545号で山梨県知事より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について通知された。

平成3年に塩山市教育委員会（現・甲州市）が実施した西田遺跡第3次調査により、当該地に埋蔵文化財が遺存することは既に確認されており、開発により埋蔵文化財が失われる可能性が高い建物外周にあたる側基礎部分に限り、事業者の負担にて記録保存することとなった。

令和4年1月26日、「山梨県内の記録保存のための埋蔵文化財調査における民間調査組織の利用に関する指針」に基づき、事業者より昭和測量株式会社が発掘調査業務を請け負い、令和4年2月28日に事業者、甲州市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、同日付で文化財保護法第92条第1項に基づく届出を昭和測量株式会社が提出した。令和4年3月8日付文化第4645号で山梨県知事より、埋蔵文化財発掘調査の実施について通知され、令和4年4月5日から発掘調査に着手し、記録保存を行った。



第2節 発掘作業の経過

発掘調査は令和4年4月5日から5月10日の期間で実施した。準備工を含めた調査経過は下記の調査日誌抄録の通りである。

調査日誌抄録

令和4年

- 3月4日(金) 既存建物解体中の現地にて打合せ。発掘調査計画・店舗建設工事計画の情報共有を行う。
- 4月1日(金) 調査区の測り出し。周辺の既存基準点の現況、搬入路等の確認のため踏査。
- 4月5日(火) 発掘道具・重機の搬入。ネットフェンスによる仮囲い、倉庫・トイレの仮設施設の設営。重機による表土掘削、人力による包含層掘削を開始。
- 4月6日(水) 包含層掘削終了部より遺構プラン検出作業を開始。土坑状プランや古墳時代前期の高坏脚を確認。
- 4月7日(木) 測量基準点3点を事業地内に仮設。遺構外出土遺物の座標計測・取り上げを開始。
- 4月8～12日 重機による表土掘削、人力による包含層掘削・遺構プラン検出作業。現地地表下120cm付近で隅丸方形プラン・円形状プランを複数確認。
- 4月13日(水) 遺構プラン検出状況を撮影し、遺構の掘削・図化等記録を開始。
- 4月14日(木) SI1の記録完了。SI2の掘削を開始し床面より遺構プランを確認。
- 4月15日(金) 降雨により現場作業は半日。石和事務所にて現場図面・写真等の整理。
- 4月18日(月) 排水・復旧作業後、調査区東側の記録を完了。降雨により現場作業は半日。整理を行う。
- 4月19日(火) 排水・復旧作業後、SI2の記録を開始。SI3の掘削を開始し床面より遺構プランを確認。
- 4月20日(水) 調査区南側の記録を完了。
- 4月21日(木) SI2の記録完了。SI3の記録を開始。SI4・SX2の掘削・記録を開始。
- 4月22日(金) 排水・復旧作業後、SI3の記録完了。
- 4月25日(月) SI4・SX2の記録完了し、清掃・環境整備。完掘状況・景観等をドローンにより空中撮影。教育委員会担当者の調査終了確認を受け、15時頃より埋め戻し作業を開始。
- 4月26・27日 埋め戻し・転圧等の原状復帰作業。徒歩により地形・寺社・石造物等の周辺環境を観察。
- 4月28日(木) 埋め戻し終了。仮囲いの撤去、重機・トイレ等仮設施設の搬出。現場撤収し原状復帰。
- 5月10日(火) 沈下等の原状復帰後の最終確認を行い、現場調査を終了。
- 5月13日(金) 埋蔵物発見届・保管請書、埋蔵文化財保管証を提出。

第3節 整理等作業の経過

整理作業および報告書刊行業務は、令和4年5月10日から令和4年9月30日の期間で、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社文化財調査課の事務所内にて実施した。なお、整理作業中は必要に応じて甲州市教育委員会と連絡・打合せを行った。

整理作業は出土遺物の水洗・注記の基礎整理から始め、接合・復元ののち報告書掲載遺物を選出した。選出した遺物は手書きで実測したのち、デジタルトレース・写真撮影等の記録作業を行い、並行して遺物観察表の作成や、現場で記録した実測図の整理作業を行った。その後、挿図・図版の編集を行い、原稿の執筆、全体の編集と作業を進め、令和4年9月30日に発掘調査報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第2図）

山梨県東部に位置する甲州市は、塩山市・勝沼町・大和村の3市町村が平成17年（2005）に合併することで誕生した市で、東は大月市・小菅村・丹波山村、西は山梨市、南は笛吹市、北は埼玉県秩父市にそれぞれ接している。西田遺跡の所在する旧塩山市域は、北東側半分が秩父山系の大菩薩嶺西麓にあたる山間地である。南西側半分は大菩薩嶺・柳沢峠に端を発する笛吹川支流の重川によって形成された南西へ緩やかに傾斜する扇状地によって構成される。人口は「塩山」の地名の由来となった標高556mの独立低山の塩ノ山（しおのやま）南側に広がる扇状地に集中する。

西田遺跡は、重川によって形成された扇状地帯のうち、重川右岸扇状部の南北にやや長い微高地上に展開する古墳時代前期を主とする集落遺跡で、遺跡の標高は364～367mを測る。遺跡中央付近に地形の転換点があり、遺跡北側は平坦地であるが、遺跡南側は甲府盆地側へ向け流下する重川の氾濫原へ向け傾斜している。重川はこの微高地を巡るように流れを変えることから、かつては自然堤防の役目を成していたものと考えられる。今回の調査区はこの自然堤防の末端に近い傾斜面に所在する。

第2節 歴史的環境（第2図・第1表）

旧石器時代

調査区が所在する旧塩山市域南側では、旧石器時代として周知される埋蔵文化財包蔵地（以下遺跡）は皆無であり、調査事例もない。

縄文時代

草創期から早期に当たる遺跡はほぼ無く、わずかに有舌尖頭器等の石器類の採集が報告される程度である。前期以降になると重川を中心として次第に遺跡が展開しはじめ、横位・大木戸遺跡（塩33）からはイノシシの獣面突起を有する縄文前期の諸磯b式のほか、中期中葉の勝坂（新道段階）式も報告されている。特に中期から後期に属する遺跡が多く、牛奥遺跡（塩2）では中期初頭の五領ヶ台式から中期後半の曾利式、町田遺跡（塩16）では五領ヶ台式・勝坂（藤内Ⅱ段階）式・曾利式と中期後半終末の加曾利E系が報告されている。西田遺跡（塩6）でも五領ヶ台式や勝坂（藤内段階）式がわずかに確認されている。縄文時代の遺跡の分布は主に第2図北東側図外の重川上流山間地に集中する。縄文中期の著名な遺跡として重郎原遺跡（塩136：図外）や安道寺遺跡（塩119：図外）、殿林遺跡（塩152：図外）の名が挙げられる。殿林遺跡では耕作中の市民により大型の曾利式土器の深鉢が発見され、その精緻な文様や欠損がほぼ見られないことなどから昭和63年に土器単体でありながら重要文化財に指定されている。しかし、後期になると遺跡の分布は地域全体で次第に減少していく。

弥生時代

縄文時代終末期から弥生時代の遺跡は、縄文中期の賑わいに比して極めて低調となる。弥生時代の遺跡は重川流域の河岸段丘上または扇状地帯に点在するも、発掘調査によって遺構が確認されているのは西田遺跡を含む2遺跡で、西田遺跡では1基の弥生時代後期の住居が確認されている。弥生時代については不明な部分が多く、再び地域に賑わいが訪れる古墳時代を待つことになる。

古墳時代

古墳時代の遺跡として地域を代表するものが本調査区の所在する西田遺跡である。西田遺跡は方形周溝墓を伴う古墳時代前期の大集落で、これまでの発掘調査で竪穴住居65基、方形周溝墓5基が報告されており、その調査成果は坂井南遺跡（韮崎市）や姥塚遺跡（笛吹市御坂）とともに山梨県における古墳時代前期の集落内構造を解明するうえで重要な役割を持つ。このほか東田遺跡（塩7）、芦原田遺跡（塩8）、坂之上・后

畑遺跡（塩 29）、五反田遺跡（塩 30）といった主に古墳時代前期の遺跡が分布する。集落遺跡が分布するにもかかわらず旧塩山市域では古墳は皆無であり、周辺でも重川を南へ跨いだ旧勝沼町域に穴塚古墳（勝 8）、天神塚古墳（勝 20）が確認できる程度と、甲府盆地を挟んだ南側対岸に位置する中道地域や八代地域の前期古墳の集中する様相と対照的である。

奈良・平安時代

西田遺跡より北西へ約 300m 地点に鎮座する熊野神社（塩 25 内）は、『甲斐国志』によると大同 2 年（807）に託宣に従い紀伊国より熊野権現を勧請し創祀（『社記』では再建）し、地名を熊野と改めたといい、保元 2 年（1157）には後白河法皇が規矩をとり社殿を建立したとも伝わる。

当地域は、平安時代中期の承平年間（931 - 938）に編纂された『和名類聚抄』に見られる山梨郡 10 郷のうちの「於曾郷」に推定されている。10 世紀前半から竪穴住居を伴う遺跡が増加し、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて特に隆盛を見せる。宇賀屋敷遺跡（塩 47）や於曾屋敷遺跡（塩 50）では竪穴住居や墨書土器が確認されており、后畑遺跡（塩 29）では 56 基にのぼる竪穴住居やカマドの祭祀遺構のほか墨書土器、灰釉・緑釉陶器の報告がある。ケカチ遺跡（塩 28）では平成 27 年から 28 年にかけて実施された発掘調査で、一辺 8 m に及ぶ大型竪穴住居を含む竪穴住居 49 基から成る集落と二条一対の区画溝が確認された。この集落で出土した「和歌刻書土器」は焼成前に仮名書きで和歌が刻まれた 10 世紀中頃の甲斐型土器で、漢字から仮名への変遷と中央と地方の関りを解明する貴重な資料である。これらの遺跡が所在する下於曾地域が「於曾郷」の有力地と考えられる。また、「塩を産出した」「四方を（から）良く見える」「はるかな潮路からきた」などが名の由来と伝わる塩ノ山は、古来より歌枕として知られている。延喜 5 年（905）に奏上された『古今和歌集』に収められる「志ほの山 差出の磯に 住む千鳥 君が御代をば 八千代とぞなく」（よみ人しらず）をはじめ「塩ノ山」は多くの歌人に詠まれ、『源有房朝臣集』『後鳥羽院御集』には文治 6 年（1185）に詠まれた歌が収められている。

中世

奈良・平安時代より引き続き甲斐国有数の賑わいを見せ、南北朝期には北朝側に属した甲斐国守護武田氏が拠点し、塩ノ山東麓に甲斐源氏 12 代当主の武田信春が館を築いた（塩 217：図外）。また、二重の土塁を廻らした土豪屋敷である於曾屋敷（塩 210）は、於曾四郎と称した甲斐源氏加賀美遠光四男四郎光経の屋敷と伝わる。大菩薩峠を抜け東国と結ぶ青梅街道沿いには、依田兵部左衛門屋敷（塩 203）や依田宮内左衛門屋敷（塩 206）、田辺氏屋敷（塩 207）といった黒川金山衆や甲斐源氏に関連する城館跡が所在する。また、平安時代初期の創祀と伝わる熊野神社ではあるが、現在では 6 棟の本殿のうちの文保 2 年（1318）の鎌倉期造営とされる 2 棟と、天文 18 年（1549）の室町期再興とされる拝殿の計 3 棟が重要文化財に指定されている。

近現代

中世より青梅街道沿いに発展してきた旧塩山市域では、明治 36 年（1903）の鉄道（現 JR 中央線）開通以降、塩山駅を中心に市街化が進むことになる。周辺は、かつては旧塩山市域の中でも特に農業が盛んな農村地であった。昭和中頃までは養蚕に要する桑や、桃・葡萄の二大果樹が多く栽培されていたが、戦後の経済成長とともに進んだ市街化や商業地化が著しく、車社会となった現代において発生する交通混雑の緩和のため計画されたバイパス道路工事に先立ち、昭和 52 年（1977）に実施された発掘調査で発見されたのが西田遺跡である。

その後、平成 11 年（1999）から自治体を広域化することで財政基盤を強化し、地方分権を推進することを目的とした市町村合併、いわゆる「平成の大合併」が政府主導で行われ、平成 17 年（2005）に塩山市・勝沼町・大和村の 3 市町村が合併することで甲州市が誕生し現在に至る。



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧 *番号は『甲州市遺跡地図』に準じ、「塩」は旧塩山市域、「勝」旧勝沼町域を示す。

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
塩1	前田遺跡	縄文	散布地	塩33	横位・大木戸遺跡	平安	散布地	塩65	番匠屋遺跡	散布地	勝1	大塚南遺跡	縄文	散布地	
塩2	牛奥遺跡	縄文	散布地	塩34	池田遺跡	中世	散布地	塩66	上三狐神遺跡	散布地	勝2	大塚北遺跡	平安	散布地	
塩3	滝ヶ上遺跡	縄文	散布地	塩35	下於曾八反田遺跡	平安	散布地	塩69	向嶽寺大方向跡	近世	勝3	松原遺跡	平安	散布地	
塩4	西堀遺跡	平安	散布地	塩36	正泉A遺跡	古墳・平安	散布地	塩104	梅ノ木遺跡	散布地	勝4	若林遺跡	平安	散布地	
塩5	住蓮木平遺跡	縄文	散布地	塩37	正泉B遺跡	古墳	散布地	塩105	中村遺跡	縄文	勝5	山富士塚	中世・近世	塚	
塩6	西田遺跡	縄文～奈良	集落跡	塩38	松遺跡	縄文	散布地	塩179	三山塚	塚	勝6	上野塚	中世	塚	
塩7	東田遺跡	縄文～古墳・平安	集落跡	塩39	影井遺跡	縄文・平安	散布地	塩180	切付平塚	散布地	勝7	天神遺跡	中世	散布地	
塩8	芦原田遺跡	弥生・古墳・平安	散布地	塩40	久保田遺跡	平安	散布地	塩181	髪切塚	中世・近世	勝8	穴塚古墳	古墳	古墳	
塩9	下整田遺跡	縄文	散布地	塩41	下西畑遺跡	縄文・古墳・平安	散布地	塩182	おせん稲荷塚	散布地	勝9	姥屋敷遺跡	縄文	散布地	
塩10	村北遺跡	奈良・平安	散布地	塩42	横塚遺跡	中世	散布地	塩183	おまん稲荷塚	散布地	勝10	下立西遺跡	縄文・弥生	散布地	
塩11	向原遺跡	奈良・平安	散布地	塩43	受地遺跡	平安	散布地	塩185	鈴の宮塚	散布地	勝11	下立石東遺跡	縄文・弥生	散布地	
塩12	扇田A遺跡	縄文	散布地	塩44	林原遺跡	縄文・平安・中世	散布地	塩189	お文殊稲荷塚	散布地	勝15	上中居遺跡	縄文・弥生	散布地	
塩13	扇田B遺跡	奈良・平安	散布地	塩45	天神原遺跡	縄文・平安	散布地	塩190	梅ノ木塚	散布地	勝17	大門後遺跡	平安	散布地	
塩14	扇田C遺跡	縄文・奈良・平安	散布地	塩46	宮沢遺跡	縄文・古墳・平安	散布地	塩197	西野原煉瓦工場跡	近現代	その他	坂上遺跡	平安	散布地	
塩15	十王前遺跡	平安	散布地	塩47	宇賀屋敷遺跡	奈良・平安・中世	集落跡	塩199	田草川氏屋敷	中世	勝19	中村遺跡	縄文	散布地	
塩16	町田遺跡	縄文	集落跡	塩48	藤板遺跡	中世	散布地	塩201	西ノ原の壁	中世	勝20	天神塚古墳	古墳	古墳	
塩17	薬師平遺跡	平安	散布地	塩49	西畑A遺跡	平安・中世	散布地	塩202	深沢氏屋敷	中世	勝21	小佐手氏館跡	中世	城館跡	
塩18	清水田遺跡	奈良・平安	散布地	塩50	於屋敷遺跡	平安・中世	城館跡	塩203	依田兵部左衛門屋敷	中世	勝22	大塚塚	縄文・近世	塚	
塩19	道替遺跡	弥生・古墳	散布地	塩51	神之木遺跡	縄文・古墳・平安	散布地	塩204	中村氏屋敷	中世	勝63	塚六遺跡	古墳	散布地	
塩20	知光田遺跡	平安	散布地	塩52	西畑B遺跡	縄文・中世	散布地	塩205	間風氏屋敷	中世	勝67	立正寺旧境内	近世	寺跡	
塩21	上塩後遺跡	古墳～平安	散布地	塩53	相ノ田遺跡	縄文・古墳・平安	散布地	塩206	依田宮内左衛門屋敷	中世	勝68	休息塚	縄文	塚	
塩22	中道遺跡	平安	散布地	塩54	南畑遺跡	弥生	散布地	塩207	田辺氏屋敷	中世	勝69	立正寺跡	近世	寺跡	
塩23	熊野前田遺跡	平安	散布地	塩55	昔田神社遺跡	縄文	散布地	塩208	池田氏屋敷	中世	勝70	大聖院跡	近世	寺跡	
塩24	熊野八反田遺跡	平安	散布地	塩56	稲荷林遺跡	平安	散布地	塩209	手賀屋敷	中世	勝71	一乘院跡	近世	寺跡	
塩25	熊野神社遺跡	弥生・古墳	散布地	塩57	宮之前遺跡	平安	散布地	塩210	於屋敷	中世	勝78	泰山藤塚	中世・近世	塚	
塩26	梶畑A遺跡	古墳～平安	散布地	塩58	清水尻遺跡	縄文・古墳・平安	散布地	塩211	八代氏屋敷	中世	勝100	北林	古墳	城館跡	
塩27	梶畑B遺跡	古墳～平安	散布地	塩59	千手院前遺跡	縄文	散布地	塩212	保坂氏屋敷	中世	勝101	小丸山百番観音	中世	城館跡	
塩28	ケ力子遺跡	古墳・平安	散布地	塩60	秀森前遺跡	平安	散布地	塩213	於曾三郎屋敷	中世	勝101	小丸山百番観音	中世	城館跡	
塩29	坂之上・后畑遺跡	平安	散布地	塩61	高林遺跡	縄文・中世	散布地	塩214	橋爪氏屋敷	中世	勝101	小丸山百番観音	中世	城館跡	
塩30	五反田遺跡	古墳	散布地	塩62	塩山前遺跡	縄文	散布地	塩215	清水清左衛門屋敷	中世	勝101	小丸山百番観音	中世	城館跡	
塩31	石骨A遺跡	縄文・平安	散布地	塩63	金山遺跡	平安～近世	散布地	塩216	平塚	平安	勝101	小丸山百番観音	中世	城館跡	
塩32	石骨B遺跡	平安	散布地	塩64	青木沢遺跡	平安	散布地	塩219	古屋敷屋敷	中世	勝101	小丸山百番観音	中世	城館跡	

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

事業地内では、平成3年に塩山市教育委員会（現・甲州市）により、店舗建設を起因とする発掘調査（西田遺跡第3次調査1・2区）が実施されており、既に埋蔵文化財の遺存状況が把握されていることから、本発掘調査に先がける試掘確認調査は行われていない。この第3次調査の成果から、現地表下約70cmで古墳時代の遺構面に達することが想定された。

今回の調査対象範囲（以下調査区）は、1,025㎡の事業地内に計画された長方形の新築建物建築面積373.44㎡のうち、建物外周基礎部分および基礎工事に伴う掘削が想定される範囲に限定された。調査区は「ロ」字状で対象面積は約185㎡である。このうち北側の一部（約35㎡）は先述の第3次調査1区と重複する。

調査期間中は、調査区への侵入・転落等の予防のため、ヤードを含めた事業地全体のうち西南北の三方をネットフェンスで仮囲いし、コーン・コーンバー、警告灯による視認性向上を図る等の保安対策を講じた。また、事業地への進入口となる歩道舗装面の保護・防汚のため、車両通行時にはゴムマットによる養生をおこなった。このほか、表土掘削等の各種工程毎に教育委員会担当者の確認を受け、作業工程の打合せを行った。

重機による表土掘削は、部分的に地山まで掘削することで土層を観察しつつ、平均で厚さ25cm程度となる包含層の上部5～10cmまで行った。最終的な表土掘削深度は現地表下80～100cmまでである。なお、想定された遺構確認面を超える深さの掘削を行っているのは、かつて耕作地であった当該地に対し、第3次調査後に店舗建設に伴う盛土造成が行われていたためである。重機による掘削土は3tダンプトラックを用いヤード北東部の廃土仮置き場へと場内運搬した。

表土除去が終了した部分より順次、人力で包含層を除去したのち、鋤簾・両刃三角鎌を用い精査し遺構プランの検出を行った。なお、記録済みとされる調査区北端の第3次調査1区重複部においてもプラン検出作業を行い、新たに遺構プランを確認した。検出した土坑状・小穴状の遺構については、半截し土層の撮影と実測図作成ののち完掘した。また、竪穴住居状の遺構については、覆土をベルト状に残し、同じく土層の記録ののち完掘した。調査は、掘削土運搬の利便性から「ロ」字状の調査区の北東側グリッドG-5付近より時計回りに作業を行い、人力による掘削土は、第3次調査1区重複部のうち、新たな遺構プランが確認されなかった範囲に仮置きし、重機により随時調査区外へ引き上げ、廃土仮置き場へと運搬した。

現場での記録は、遺構の土層断面図については原則手書き実測を行い作成した。平面図についてはSOKKIA社製トータルステーション「CX-105」・Panasonic社製屋外型ノートパソコン「TOUGHBOOK CF-19」・cubic社製遺構実測支援ソフト「遺構くん」による電子平板測量と、SONY社製ミラーレス一眼カメラ「α5100 + E 20mm F2.8 SEL20F28」・高所撮影用ポール・Agisoft社製画像処理ソフト「PhotoScan Professional」による写真測量を併用し作成した。遺構や調査経過の写真はNikon社製デジタル一眼レフカメラ「D7100 + AF-S DX NIKKOR 16-85mm F3.5-5.6G ED VR」を用い撮影した。また、DJI社製無人航空機「Phantom 4 Pro」により全体完掘状況および立地環境・景観を撮影した。

整理・報告書作成では、出土遺物の水洗、注記、接合、復元と進め、遺物の実測はすべて手描きで行った。遺物の写真はNikon社製デジタル一眼レフカメラ「D7500 + AF-S NIKKOR 28-300mm F3.5-5.6G ED VR」を用い撮影した。また、デジタルトレース、写真補正、挿図・図版作成にはadobe社製「illustratorCC」「PhotoshopCC」を、報告書執筆編集にはadobe社製「InDesignCC」をそれぞれ用いた。

第2節 基本層序 (第3・4図)

周辺の土地傾向として、地域全体が調査区より南へ約400m地点を甲府盆地側へ流下する重川に向け傾斜している。事業地内における最大高低差は北西隅(標高365.59m)と南東隅(標高364.47m)で、水平距離50.53m、高低差1.12mを測る(勾配2.21%)。

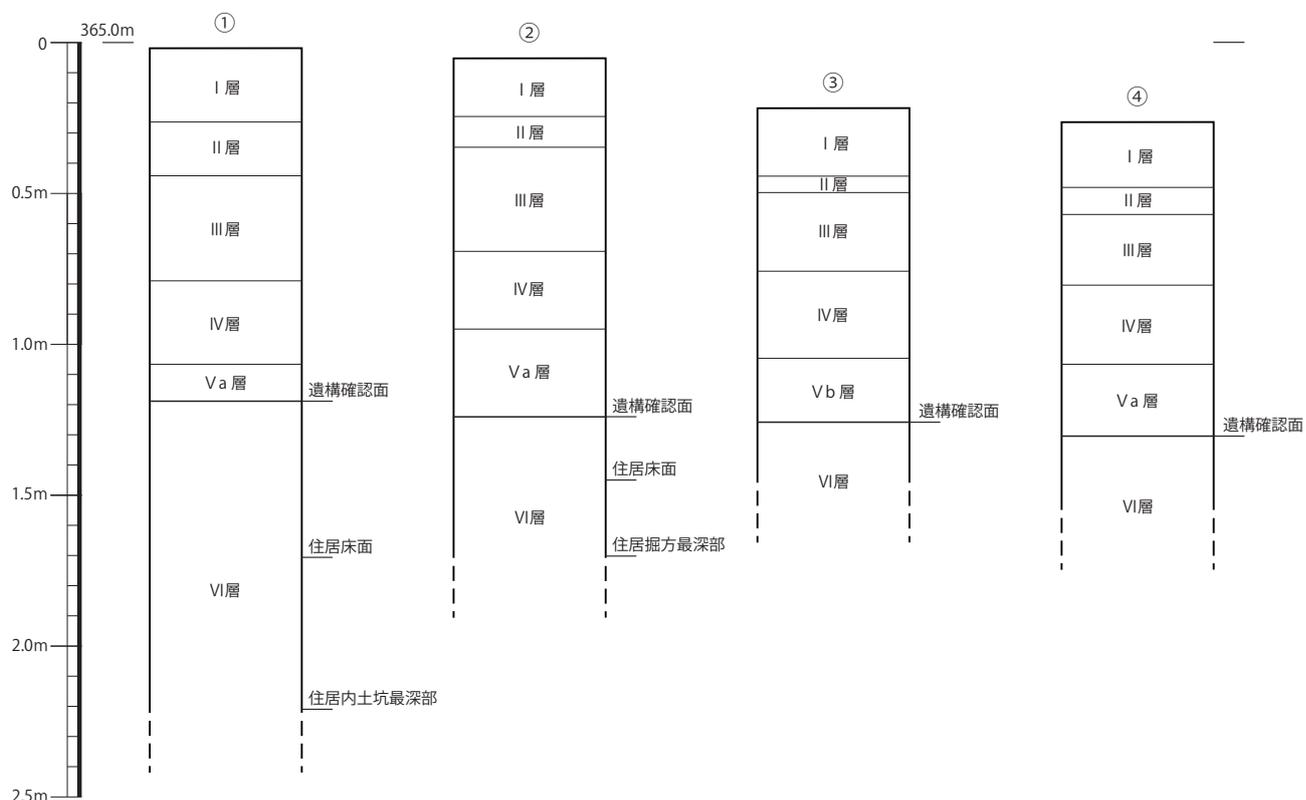
前節で述べたように、平成3年の第3次調査前後に事業地全体で20～50cm程度の盛土造成が行われており、I・II層がこれに該当する。I層は第3次調査直後に行われた造成に伴う盛土および碎石、直近の建物解体・工作物撤去に伴う攪乱である。II層は第3次調査以前に行われた造成に伴う層で、針金・コンクリート片が散見される客土を強固に転圧しており、青黒く変色し油分が見られることなどからも、旧来の耕作地を造成して利用していたことがわかる。

III層は耕作土層である。厚さ20～45cm程度のにぶい褐色をしたシルト質粘土の堆積で、層上部ではブドウと推定される植物根が、層下部ではクワと推定される植物根が各所に見られ、締りは不均等で斑がある。

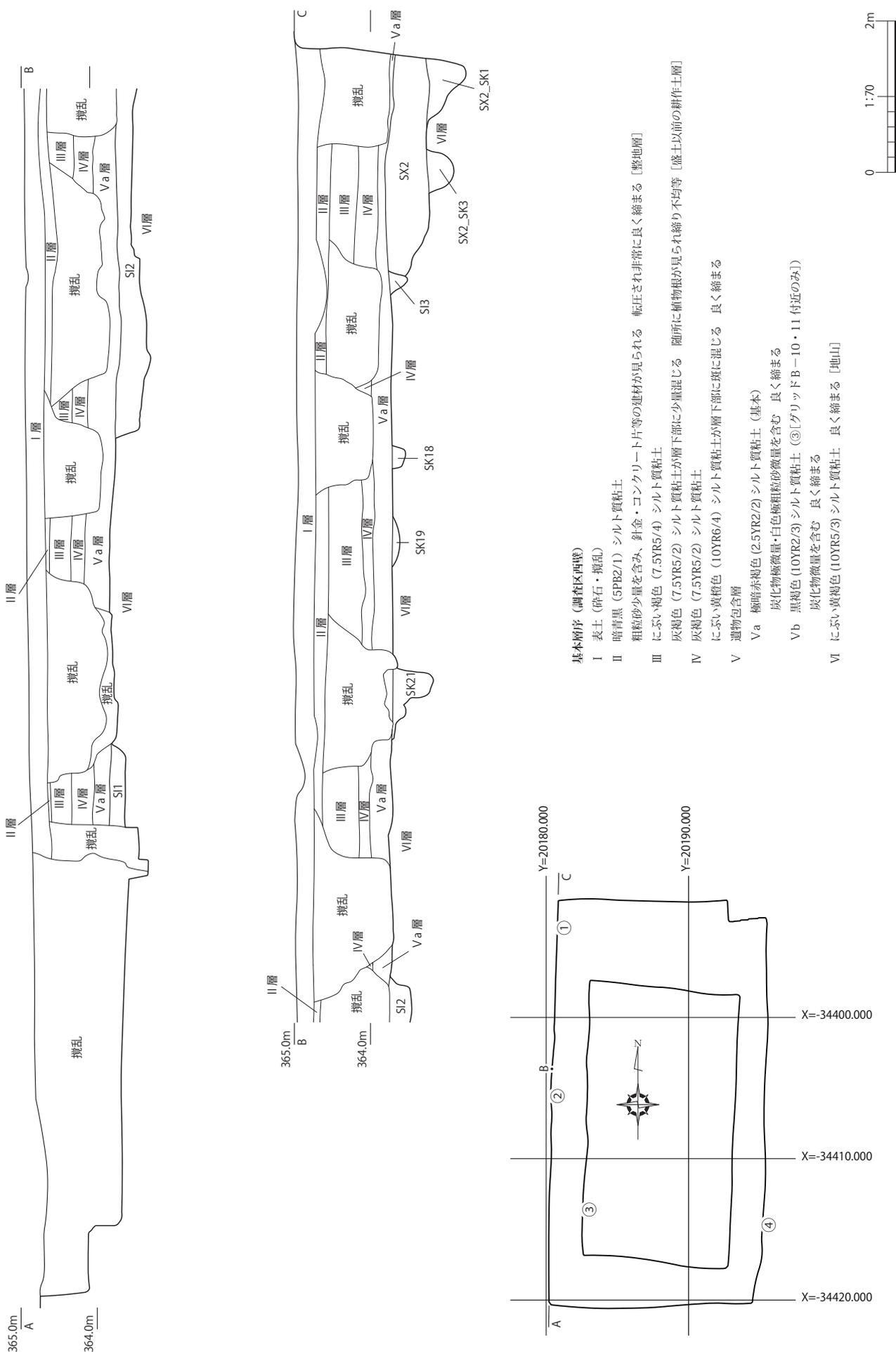
IV層は自然堆積層である。灰褐色のシルト質粘土を主体とする堆積であるが、層下部ではにぶい黄橙色のシルト質粘土が斑に混ざり込む。このIV層に遺物や炭化物・焼土は皆無である。

V層は遺物包含層である。古墳時代前期の遺物、微量の炭化物・白色極粗粒砂含む黒味の強い極暗赤褐色のシルト質粘土が調査区全域で堆積(Va層)するが、大型の攪乱に接するグリッドB-10・11付近でのみ黒褐色(Vb層)を見せる。なお、白色極粗粒砂は調査区南側に行くほど増加する傾向が見られる。

VI層は地山である。白色極粗粒砂を含むにぶい黄褐色のシルト質粘土の堆積で良く締まっている。遺構確認面は上記の包含層を除去した先の地山上面である。調査区内(遺構確認面)における最大高低差は北西隅(標高363.81m)と南東隅(標高363.48m)で、水平距離31.05m、高低差33cmを測り(勾配1.09%)、現地表面に比して傾斜は緩やかである。また、事業地東辺に接しながら南流する小河川は、現在小規模な谷地形を見せるが、調査区内から東へ落ち込む傾斜が認められないことから、遺跡の埋没以降に人工的に開削された用水路であると考えられる。



第3図 基本層序(1)概略



基本層序 (調査区西壁)

- I 表土 (碎石・攪乱)
- II 暗青黒 (5PB2/1) シルト質粘土
粗粒砂少量を含み、針金・コンクリート片等の建材が見られる 転圧され非常に良く締まる [整地層]
- III にぶい、褐色 (7.5YR5/4) シルト質粘土
灰褐色 (7.5YR5/2) シルト質粘土が層下部に少量混じる 随所に植物根が見られ締め不均等 [盛土以前の耕作土層]
- IV 灰褐色 (7.5YR5/2) シルト質粘土
にぶい、黄褐色 (10YR6/4) シルト質粘土が層下部に混じる 良く締まる
- V 遺物包含層
Va 極暗赤褐色 (2.5YR2/2) シルト質粘土 (基本)
炭化物極微量・白色極粗粒砂微量を含む 良く締まる
Vb 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 (③[グリッドB-10・11 付近のみ])
炭化物微量を含む 良く締まる
- VI にぶい、黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土 良く締まる [地山]

第4図 基本層序 (2) 調査区外周西壁

第4章 調査の成果

調査では、遺構として竪穴住居5基、性格不明遺構1基、土坑22基、小穴9基を検出した。各遺構名はプラン検出段階で付したものであり、報告書でも当初の遺構名を踏襲しているが、現場調査・整理の過程で性格が新たに判明したものについては、遺構名に関わらず対応する各節に振り分け記述する。

遺物は土師器を主体とし、石製品1点とわずかながら縄文土器も出土している。出土遺物量はプラスチックコンテナ（386mm×590mm×207mm）にして2箱分に相当し、総重量は約10.6kgである。

第1節 竪穴住居

検出した竪穴住居はS I 1～4、S X 2の5基である。S X 2は遺構プラン検出の段階では直上の攪乱の影響や重複関係によりプラン形状が不定形で性格判定が不可能であったことから「S X：性格不明」と付したが、調査の過程で竪穴住居と判明したため本節に記述する。遺物の年代・分類は『山梨県史 資料編2 原始・古代2（第2章 山梨県の考古学編年）』（県史編年）を基準にしている。

S I 1（第7・15図、図版3・9）

〔位置・重複〕グリッドB-10。重複する遺構はない。

〔形状・規模〕平面形状はN-21°-Eを主軸とする方形が想定され、主軸1.12m以上、交差軸2.02m以上を測るが規模は不明。断面形状は皿形が想定され、深さ21cmを測る。

〔検出状況・埋土〕検出はV b層直下のVI層上面である。外周西壁調査区外へ延伸するとともに、大部分が著しい攪乱により消失するため、確認は全体規模の10%に満たない。床はやや硬化するため、たたき締められていると考えられる。埋土は炭化物・白色極粗粒砂を少量含む暗褐色シルト質粘土を主体とする。

〔出土遺物〕台付甕（報告番号1）、高坏（2）を図示したほか、土師器小片が出土した。1はS字状口縁台付甕（以下S字甕）で、口縁端部および肩部が出土しておらずギザミや横走るハケ目の有無は確認できないが、口縁がやや外開きとなるためD類である可能性がある。2は高坏の坏部で内面はハケ調整後ミガキが施されている。

〔時期〕検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半、4世紀後葉から5世紀前葉と推定している。

S I 2（第8・15図、図版3・9）

〔位置・重複〕グリッドB-6～8。重複する遺構はない。

〔形状・規模〕平面形状はN-24°-Wを主軸とする隅丸方形で、主軸4.81mを測り、交差軸は2.34m以上。断面形状は皿形で、床面までは深さ28cm、掘方最深部は41cmを測る。また、北側に舌状の突出部を有する。

〔検出状況・埋土〕検出はV a層直下のVI層上面である。外周西壁・内周東壁調査区外に延伸するため、確認は全体規模の40%程度である。床は粗粒砂を混ぜた粘質土を強固にたたき締めた貼床状で、床面からは土坑2基と小穴1基を検出した。土層観察の結果、住居北側の舌状突出部は切り合い関係のある別遺構ではなく、住居付属施設と考えられるが性格は不明。埋土は、床面より上層は炭化物・焼土を含む暗褐色シルト質粘土を主体とし、加えて炉の付近は白色極粗粒砂を含む。貼床直下の掘方埋土は、黒褐色粘土を主体とし、地山と同質のにぶい黄褐色シルト質粘土が斑ないしブロック状で多量に混じる。

〔出土遺物〕台付甕（3～7、11）、壺（8・9、12）、鉢（10）を図示したほか、土師器小片が出土した。なお、11・12は炉（土坑S I 2_ SK 1）よりの出土である。3・11はS字甕B類で肩部に横走りするハケ目が施される。4の台付甕は内外で合計3種のハケ調整が認められる。9の底部はミガキのように滑らかなヘラケズリである。12は折り返し口縁壺である。

〔時期〕検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半、4世紀中葉である。

S I 3（第9・10・15・16図、図版3・9・10）

〔位置・重複〕グリッドB・C-1～3、D-2・3。S X 2に後続する。

[形状・規模] 平面形状はN-29°-Wを主軸とする隅丸方形で、主軸 4.29m、交差軸 4.27mを測る。断面形状は概ね皿形で、住居内周溝に当たる両端のみが舟形に一段窪む。床面までは深さ 19cm、周溝底までは 27cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はV a層直下のVI層上面である。住居隅の一部が外周西壁調査区外に延伸するが、遺構のほぼ全容を確認した。床は粗粒砂を混ぜた粘質土を強固にたたき締めた貼床状で、床面から土坑3基を検出したが、柱穴となり得る小穴は確認できない。また、住居内は周溝が「口」字状に巡る。埋土は、床上は黒褐色シルト質粘土を主体とするが、周溝内は灰黄褐色粘土が主体である。埋没状況として、まず住居内周溝の低地(南東)側より埋没し、一時的に床面とフラットになった様子が土層断面より観察できる。

[出土遺物] 台付甕(13~17)、壺(18・19)、器台(20)、高坏(21)を図示したほか、土師器小片が出土した。なお、21は貯蔵穴(S I 3_ S K 1)よりの出土である。13・14はS字甕だが、肩部は未出土のため分類不明。15・16の台付甕は内外で合計3種のハケ調整が認められる。18の壺の外面はハケ調整後にミガキが施される。20の器台口縁部には積み痕が認められる。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半、4世紀後葉から5世紀前葉である。

S I 4 = 第3次調査1区“1号住居址”延伸部(第11・16図、図版4・10)

[位置・重複] グリッドE-2・3、F・G-2~4。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状はN-32°-Wを主軸とする隅丸長方形で、主軸 5.01m、交差軸 4.59mを測る。断面形状は概ね皿形で、床面までは深さ 22cmを測る。また、北側に舌状の突出部を有する。

[検出状況・埋土] 検出はV a層直下のVI層上面である。住居隅のごく一部が内周南壁調査区外に延伸するが、検出は第3次調査記録部分と合わせ全体規模の98%程度で、遺構のほぼ全容を確認したことになる。床は粗粒砂を混ぜた粘質土を強固にたたき締めた貼床状で、床面から第3次調査検出遺構の延伸部を含め土坑6基を検出したが、柱穴となり得る小穴は確認できない。また、南西コーナーを中心とする「L」字状の周溝を有する。埋土は焼土・炭化物を含む暗褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物] 台付甕(22・23)、壺(24)、高坏(25)、手捏ね土器(26)の土師器に合わせ、縄文土器(27)を図示したほか、土師器小片が出土した。22は脚台部で、一部黒色化が認められる。23は口縁部で輪積み痕が認められる。24は目の細かい横ハケ調整が口縁外周に沿って長く引かれ、また、胎土密度が高く見かけより重量感がある。25は脚台部で外面にミガキが施される。26は高台をもつ壘形である。27は地文単節縄文の深鉢で、縄文時代中期中葉に属する。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半、4世紀中葉と推定している。

S X 2 (第9・10・17図、図版4・10・11)

[位置・重複] グリッドB・C-1・2。S I 3に先行する。

[形状・規模] 平面形状はN-33°-Wを主軸とする隅丸方形が想定され、主軸 1.81m以上、交差軸 2.73m以上を測るが規模は不明。断面形状は皿形が想定され、深さ 53cmを測る。

[検出状況・埋土] 検出はV a層直下のVI層上面である。大部分は外周西・北壁調査区外に延伸するため、確認は全体の20%程度である。床はやや硬化するため、人為的にたたき締められていると考えられる。床面から貯蔵穴と想定される土坑3基を検出した。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とし、僅かに焼土・炭化物を含む。

[出土遺物] 台付甕(30~36)、壺(37・38)、高坏(39・40)、石器(41)を図示したほか、土師器小片が出土した。このうち37・39・41は貯蔵穴(S X 2_ S K 2)よりの出土である。30はS字甕の口縁部である。31・32は台付甕で、31は内外面にナデ調整が、32は内外面で合計3種のハケ調整が認められる。36は台付甕の脚台部で折り返しが認められる。37の外面は2種のハケ調整後に頸部以下にミガキが施され、内面には輪積み痕、指押し・ヘラナデ調整が見られる。41は砥石で、磨り面は円形に磨耗しているが、砥ぎ動作は主に砥石長軸方向である。

[時期] 検出層位やS I 3との重複関係、出土遺物より古墳時代前期後半、4世紀中葉から後葉と推定している。

第2節 土坑・小穴

検出した土坑は22基である。遺構名として付したSK 1～24のうち、SK 20・22は調査の過程で遺構と認められないことが判明したため欠番とした。また、検出した小穴はSP 1～9の9基である。これらの遺構は調査区北西に集中する傾向にあり、中には掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴も含まれる。しかしながら、土坑・小穴が集中するエリアは、「ロ」字状の調査区の特にな狭小な掘削幅が2mに満たない1辺に位置することもあり、遺構間の位置関係を平面的に捉えるまでには至らなかった。

SK 1 (第12図、図版4)

[位置・重複] グリッドG-9。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸53cmを測り、短軸は41cm以上。断面形状は一部が窪むが概ね皿形で、深さ9cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はVa層直下のVI層上面である。一部は外周東壁調査区外に延伸するが、検出規模は全体の90%程度である。埋土は黒褐色シルト質粘土が主体で、炭化物・白色極粗粒砂を含む。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

SK 2 (第12図、図版4)

[位置・重複] グリッドG-8。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で長軸76cm、短軸55cmを測る。断面形状は片側にテラスを有する逆台形で、主体部は深さ29cm、テラス部は深さ6cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はVa層直下のVI層上面で、SK 3と隣接する。埋土は炭化物・白色極粗粒砂を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

SK 3 (第12・18図、図版4・11)

[位置・重複] グリッドG-8。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸84cm、短軸69cmを測る。断面形状は逆台形で、深さ39cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はVa層直下のVI層上面で、SK 2と隣接する。埋土は炭化物・白色極粗粒砂を含む黒褐色シルト質粘土を主体とし、上層ににぶい黄橙色シルトがブロック状に混じる。

[出土遺物] 図示した台付甕(42)のみである。42は内外面で合計3種のハケ調整が認められ、口縁部には櫛状工具ないし貝殻による刻みが施される。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半、4世紀中葉から5世紀前葉である。

SK 4 (第12図、図版5)

[位置・重複] グリッドG-8。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸61cm、短軸49cmを測る。断面形状は皿形で、深さ14cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はVa層直下のVI層上面である。埋土は炭化物・白色極粗粒砂を含む黒褐色シルト質粘土を主体とし、にぶい黄橙色シルトがブロック状に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

SK 5 (第12図、図版5)

[位置・重複] グリッドG-7。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で長軸53cm、短軸31cmを測る。断面形状は皿形で、深さ10cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はVa層直下のVI層上面である。埋土は炭化物・白色極粗粒砂を含む暗褐色シル

ト質粘土を主体とする。

[出土遺物] 土師器小片 1 点が出土したが、図示し得るものではない。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半と考えられる。

S K 6 (第 12 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド G-4。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 42cm、短軸 36cmを測る。断面形状は皿形で深さ 9cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。埋土は白色極粗粒砂を含む暗褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 7 (第 7 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド B-8。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は卵形で長軸 49cm、短軸 42cmを測る。断面形状は舟形で、深さ 9cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 8・10 と隣接する。埋土は暗褐色シルト質粘土が主体で、褐色シルトが斑に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 8 (第 7 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド B-8・9。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形で長軸 48cm、短軸 47cmを測る。断面形状は播鉢形で深さ 24cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 7 と隣接する。埋土上層は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土、下層は暗褐色シルト質粘土が主体となる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 9 (第 7 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド B-8。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で長軸 90cm、短軸 58cmを測る。断面形状は不整形で片側にテラスを有し、主体部は深さ 22cm、テラス部は深さ 12cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。埋土上層は暗褐色シルト質粘土、下層は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土が主体となる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 10 (第 7 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド B-8。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 41cm、短軸 28cmを測る。断面形状は V 字形で深さ 34cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 7 と隣接する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土を主体とし、暗褐色シルト粘土が斑に混じる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 11 (第 7 図、図版 5)

[位置・重複] グリッド B-9・10。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形が想定され、長軸 46cm以上、短軸 34cm以上。断面形状は椀形で、深さ 19cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V b 層直下の VI 層上面である。一部は内周東壁調査区外に延伸する。埋土は暗褐色シルト質粘土が主体で、底付近にはにぶい黄褐色シルト質粘土が見られる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 12 (第 12 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-5。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形で長軸 39cm、短軸 36cmを測る。断面形状は擂鉢形で、深さ 28cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 13 と隣接する。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とし、平面・断面形状や土層断面から観察した埋土堆積状況から、掘立柱建物等の柱穴と考えられる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 13 (第 12 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-5。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 40cm、短軸 34cmを測る。断面形状は皿形で深さ 11cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 12・14 と隣接し、S I 2 舌状突出部と密接する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土を主体とし、底付近には暗褐色シルト質粘土が見られる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 14 (第 12 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-5・6。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で長軸 71cm、短軸 53cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 24cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 13 と隣接し、S I 2 舌状突出部と密接する。一部は内周東壁調査区外に延伸する。埋土は暗褐色シルト質粘土を主体とし、上層部に炭化物を含む黒褐色シルト質粘土が見られる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 15 (第 13 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-5。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 55cm、短軸 48cmを測る。断面形状は漏斗形で、深さ 20cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 16 と隣接する。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物] 土師器小片 3 点が出土したが、図示し得るものはない。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半と考えられる。

S K 16 (第 13 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-5。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形で長軸 62cm、短軸 51cmを測る。断面形状は擂鉢形で深さ 19cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 15 と隣接する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 17 (第 13 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-3・4。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 70cm、短軸 53cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 8cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S P 4 に隣接する。埋土は炭化物を含む暗褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 18 (第 13 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-3。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形が想定され、長軸 34cm以上、短軸 35cmを測る。断面形状は逆台形で、深さ 28cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はV a層直下のVI層上面である。一部は外周西壁調査区外に延伸する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 19 (第 13 図、図版 6)

[位置・重複] グリッド B-4。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整形で長軸 89cm以上、短軸 55cmを測る。断面形状は楕円形で、深さ 23cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はV a層直下のVI層上面である。一部は外周西壁調査区外に延伸する。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 20 (欠番)

S K 21 (第 13・18 図、図版 7・11)

[位置・重複] グリッド B-4・5。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整形で長軸 93cm以上、短軸 82cmを測る。断面形状はU字形で片側にテラスを有し、主体部は深さ 52cm、テラス部は深さ 17cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はV a層直下のVI層上面である。一部は外周西壁調査区外に延伸する。埋土は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物] 甕 (43)、高坏 (44)、を図示したほか、土師器小片が出土した。43 は口縁部である。44 は透孔を有する脚台部で、外面にミガキと赤色塗彩が施される。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半である。

S K 22 (欠番)

S K 23 (第 13 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド D-2。S X 1 に後続する。

[形状・規模] 平面形状は不整形で長軸 54cm、短軸 48cmを測る。断面形状はU字形で深さ 56cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はV a層直下のVI層上面である。第 3 次調査 1 区重複部より新たに検出した遺構で、遺構上部は第 3 次調査の際に削平されている。埋土は黒褐色シルト質粘土を主体とするが、一部に非常に固く締まる粘土層が見られる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S K 24 (第 13・18 図、図版 7・11)

[位置・重複] グリッド D-12。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形に近い不整形で長軸 50cm、短軸 49cmを測る。断面形状は皿形で深さ 24cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はV a層直下のVI層上面である。埋土は焼土を含む暗褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物] 壺 (45) を図示したほか、土師器小片 4 点が出土した。45 は口縁部で内面に布目が見られ、外面にはミガキが施される。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半と考えられる。

S P 1 (第 14 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド G-7。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形で長軸 26cm、短軸 24cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 6 cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はV a層直下のVI層上面である。埋土は炭化物・白色極粗粒砂を含む黒褐色質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S P 2 (第 14 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド G-6・7。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 36cm、短軸 28cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 9cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。埋土は白色極粗粒砂を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S P 3 (第 14 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド G-5。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形で長軸 29cm、短軸 25cmを測る。断面形状は播鉢形で、深さ 18cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。埋土は炭化物・白色極粗粒砂を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S P 4 (第 13 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド B-4。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 22cm、短軸 19cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 8cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面で、S K 17 と隣接する。埋土は暗褐色シルト質粘土を主体とし、にぶい黄橙色シルトがブロック状に混じる

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S P 5 (第 14 図、図版 7)

[位置・重複] グリッド B-3。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 31cm、短軸 24cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 10cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。埋土は炭化物・焼土を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S P 6 (第 14 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド D-2。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は楕円形で長軸 41cm、短軸 22cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 15cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。第 3 次調査 1 区重複部より新たに検出した。埋土は炭化物を含む黒褐色粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S P 7 (第 14 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド E-1。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整円形で長軸 27cm、短軸 24cmを測る。断面形状は皿形で、深さ 8cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。第 3 次調査 1 区重複部より新たに検出した。埋土は炭化物を含む黒褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

S P 8 (第 14 図、図版 8)

[位置・重複] グリッド D-12。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は円形で長軸 21cm、短軸 20cmを測る。断面形状は U 字形で、深さ 18cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出は V a 層直下の VI 層上面である。埋土は褐灰色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

SP9 (第14図、図版8)

[位置・重複] グリッドD-13。重複する遺構はない。

[形状・規模] 平面形状は不整楕円形が想定され、長軸30cm以上、短軸21cm以上。断面形状はV字形で、深さ23cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はVa層直下のVI層上面である。一部は外周南壁調査区外に延伸する。埋土は暗褐色シルト質粘土を主体とする。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していないが、検出層位より古墳時代前期後半と考えたい。

第3節 性格不明遺構

第3次調査1区の当該地点付近に長方形をしたサブトレンチ状の掘削痕が認められたことから、当時においても何らかの掘り込みが存在することは認識していた様であるが、遺構として報告はされていない。

SX1 (第9・10・16図、図版8・10)

[位置・重複] グリッドD-1・2。SK23に先行する。

[形状・規模] 平面形状は不明だがN-30°-Wを主軸とする遺構の一部と想定され、主軸1.51m以上、最大幅0.48m以上を測る。断面形状は皿形が想定され、深さ12cmを測る。

[検出状況・覆土] 検出はVa層直下のVI層上面である。外周北壁調査区外に延伸するとともに、大部分が第3次調査1区に削平される。埋土は黒褐色シルト質粘土が主体で、炭化物・焼土を含む。また、遺構底部はやや硬化を見せ、人為的にたたき締められている可能性がある。

[出土遺物] 高坏(28)、手握ね土器(29)を図示したほか、壺体部と土師器小片6点が出土した。28は坏部で外面にミガキが施される。29は埴もしくは鉢形である。

[時期] 検出層位や出土遺物より古墳時代前期後半である。

第4節 遺構外出土遺物

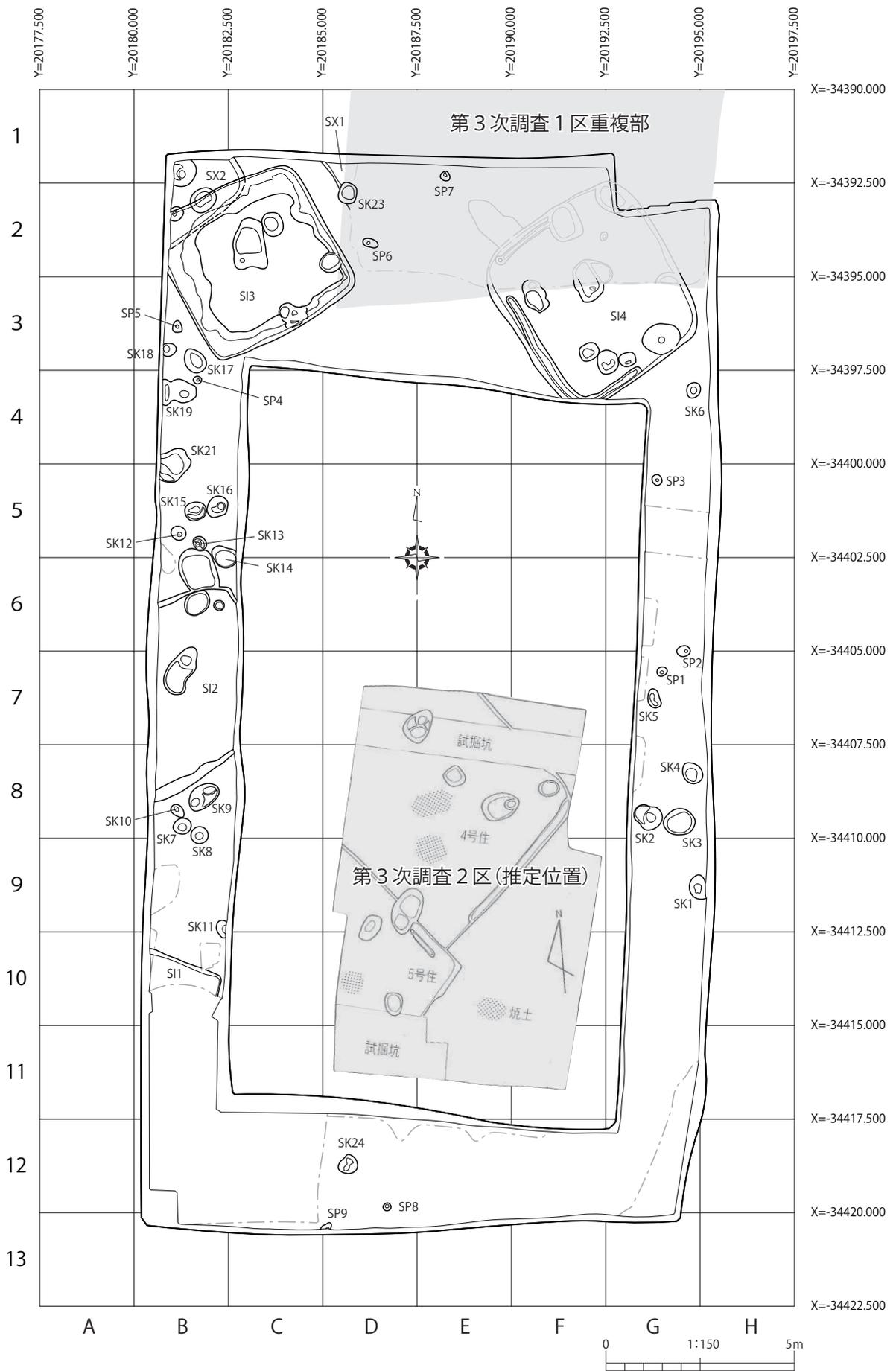
遺物包含層をはじめ、第3次調査1区や攪乱の埋土を含む調査区内から出土した遺構に伴わない遺物の量は、重量にして約1.8kgで、大半を接合不可能な1~4cm程度の細・小片が占める。その99%は古墳時代前期の土師器であるが、縄文土器が5点出土している。これらのうち10点(46~55)を遺構外出土遺物として図示した。

土師器

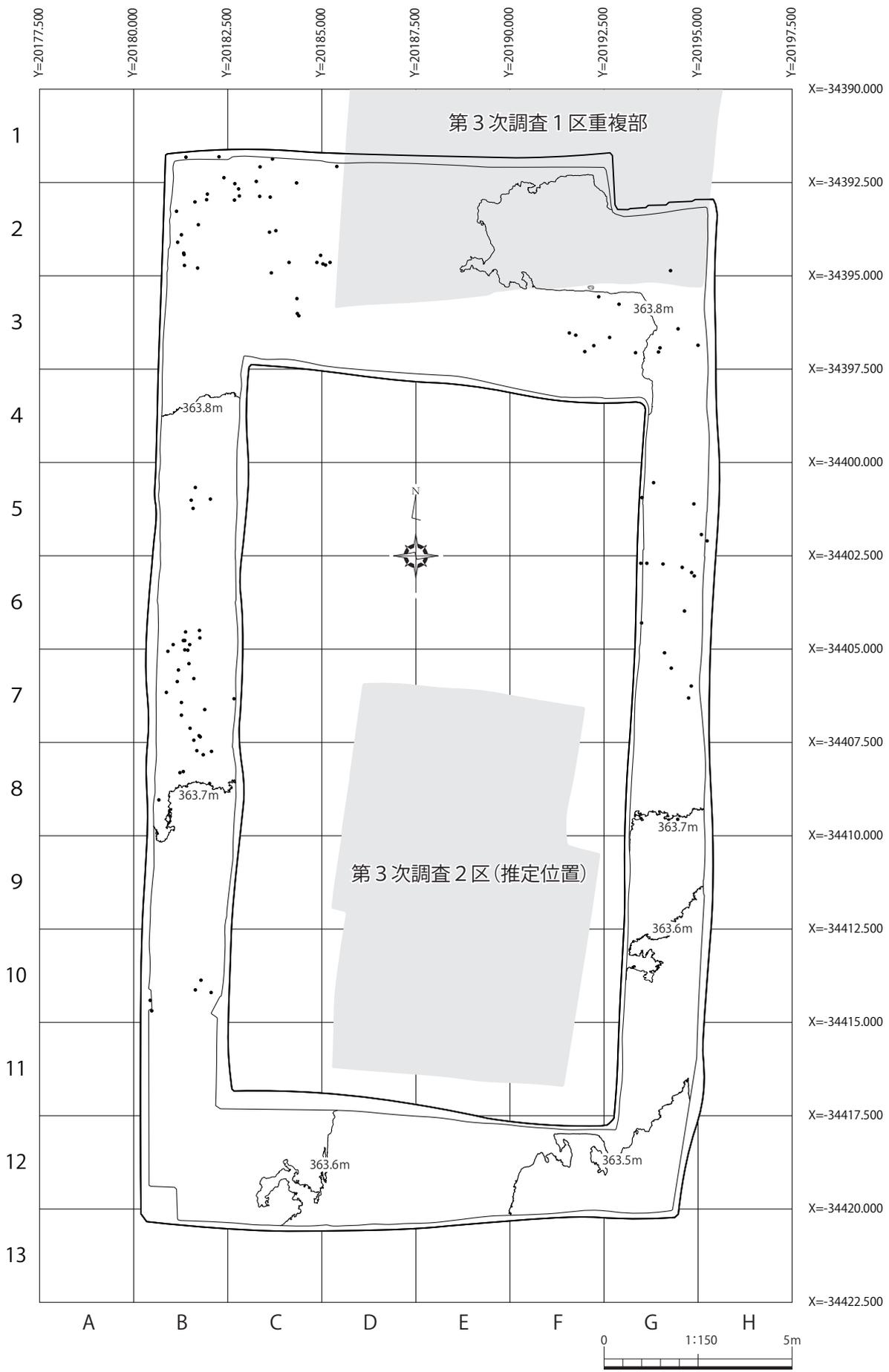
土師器は46~52の7点である。46は折り返し口縁壺で、4世紀中葉か。47は有段口縁壺で、口縁部外面には櫛状工具ないし貝殻による刻みが施される。48は壺で、内面はハケ後ナデ調整が、外面はミガキが施される。49は高坏の坏部で、内外面は回転運動を伴うヘラケズリによって調整される。50~52は高坏の脚台部で、50は透孔を有するとともに外面にミガキと赤色塗彩が施される。52の外面はハケ調整後にミガキと赤色塗彩が施される。

縄文土器

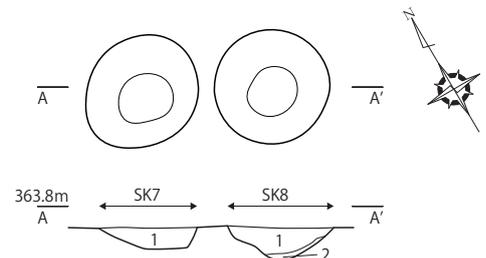
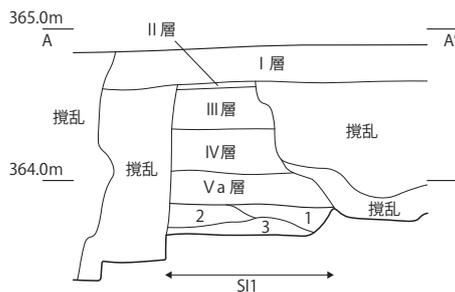
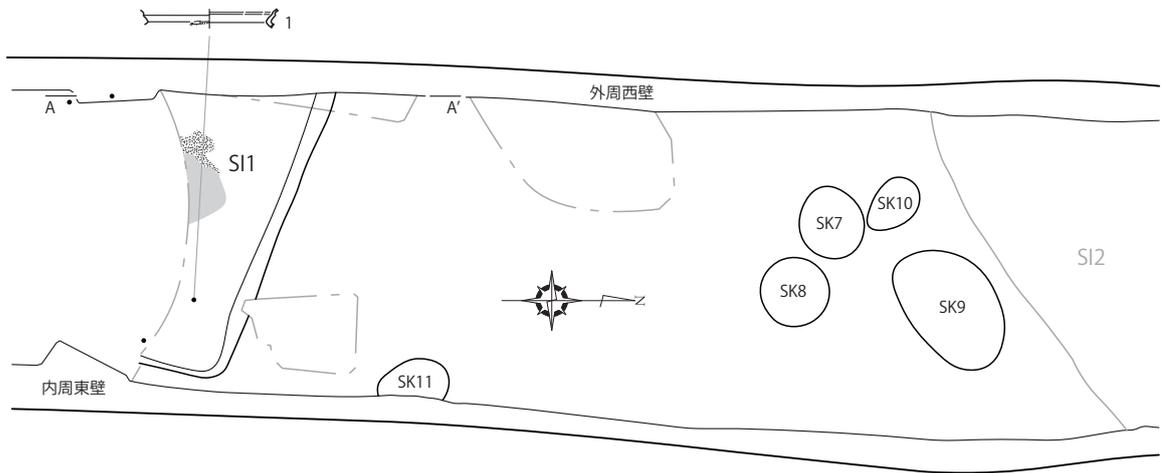
縄文土器は53~55の3点である。53は中期中葉の勝坂(藤内I段階)式で、条線文を地文とし、横位の沈線・波状沈線が施される。54・55は中期初頭の五領ヶ台式で、54は沈線による三角区画線が施される五領ヶ台I式である。55は条線文を地文とする。



※『塩山市史 史料編 第一巻』掲載平面図より、1区重複部はトレース、2区は転載
 第5図 全体図(1) 遺構配置



第6図 全体図(2) 地形および遺物出土地点



SI1(外周西壁)

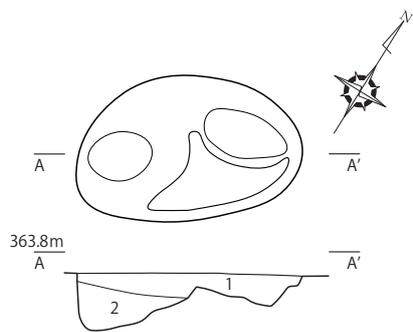
- 1 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土
炭化物・白色極粗粒砂少量、褐色(10YR4/6)ブロック微量を含む 良く締まる
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土 白色極粗粒砂少量を含む 良く締まる
- 3 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土 炭化物少量・白色極粗粒砂微量を含み、
にぶい黄褐色(10YR7/4)粘土がブロック状に混じる 良く締まる

SK7

- 1 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土
褐色(10YR4/4)シルト質粘土が斑に混じる 良く締まる

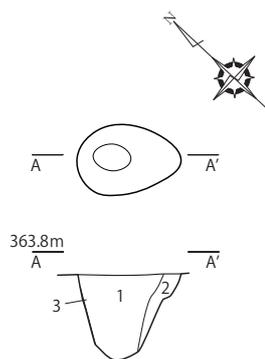
SK8

- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土
炭化物微量を含み、にぶい黄褐色(10YR7/4)シルトがブロック状に混じる
良く締まる
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土
褐色(10YR4/4)粘土が斑に混じる 良く締まる



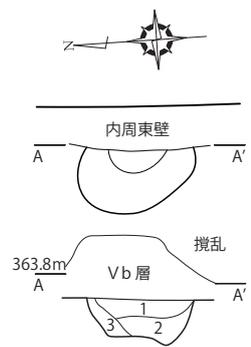
SK9

- 1 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土
白色極粗粒砂微量を含み、
褐色(10YR4/4)シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる
- 2 黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土
炭化物極微量を含み、
暗褐色(10YR3/3)粘土が斑に混じる
良く締まる



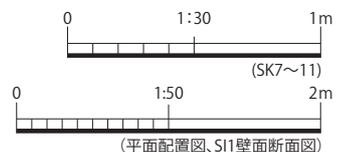
SK10

- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト質粘土
炭化物微量を含み、暗褐色(10YR3/3)粘土が斑に混じる
良く締まる
- 2 褐色(10YR4/4)シルト質粘土
暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる

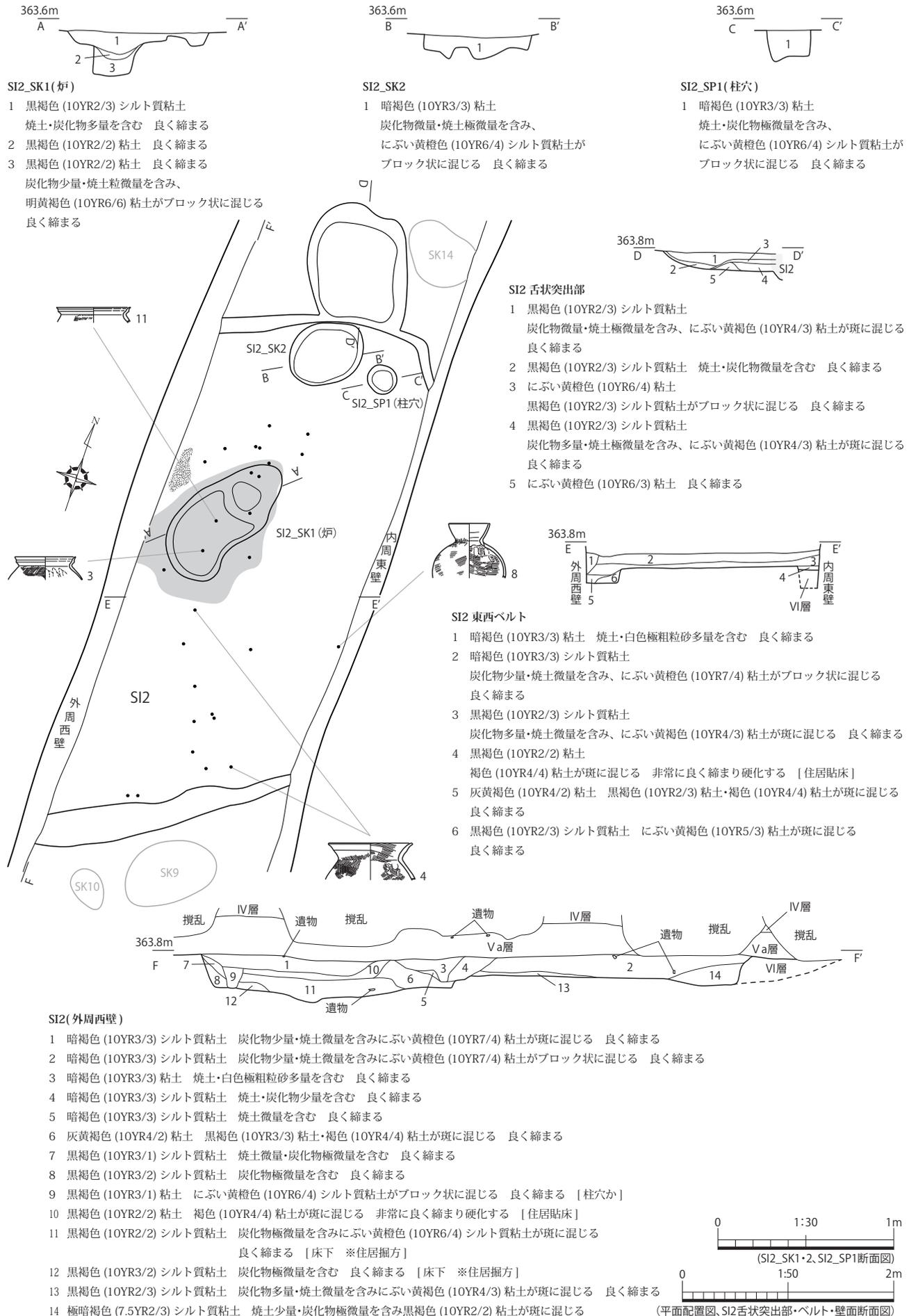


SK11

- 1 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土 良く締まる
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土
にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる
- 3 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト質粘土
暗褐色(10YR3/3)シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる



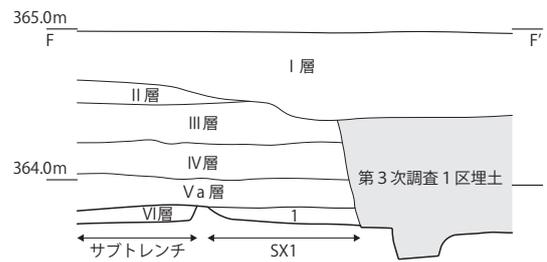
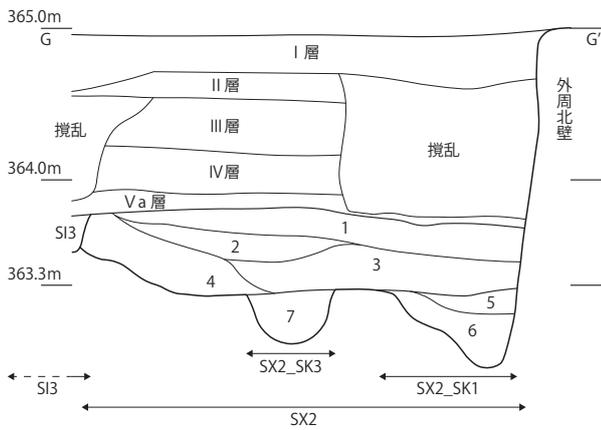
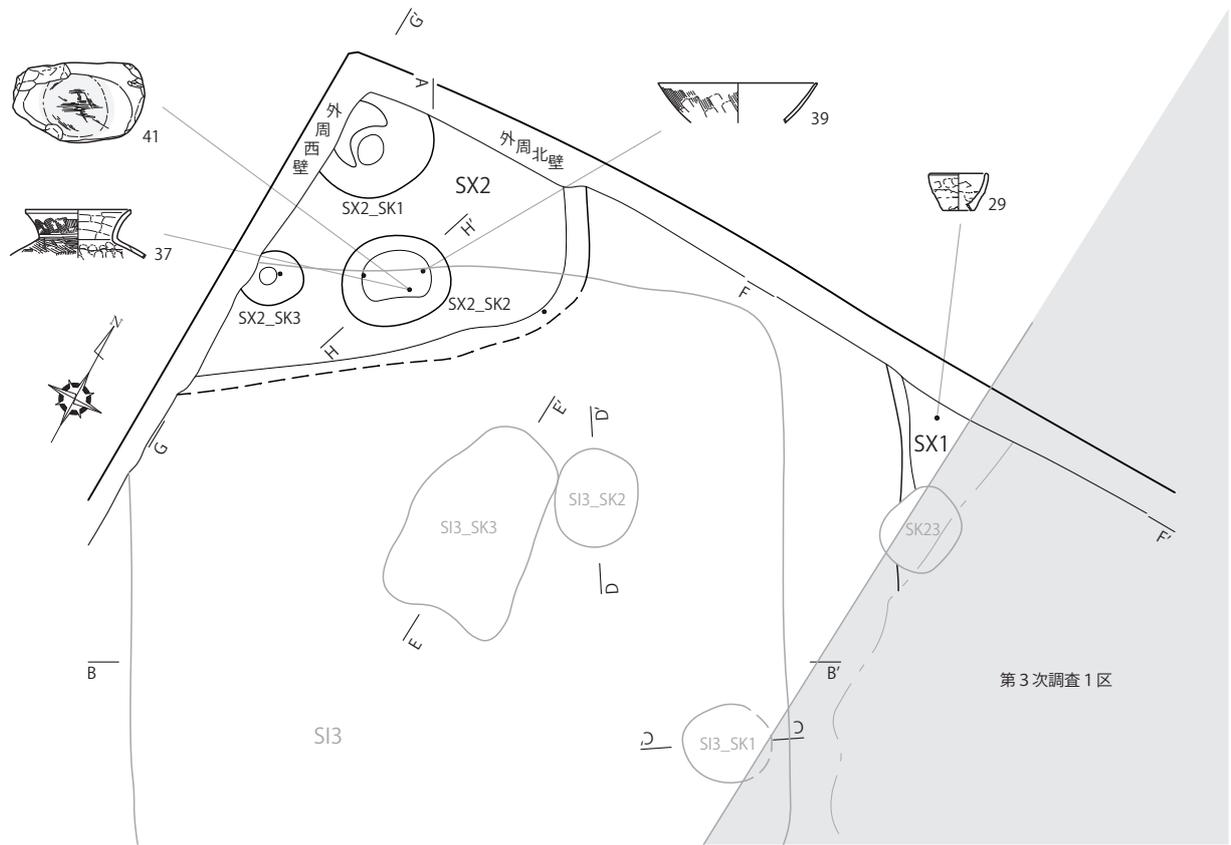
第7図 SI1、SK7~11



第8図 SI2



第9図 SI3, SX1・2(1)



SX1 (外周北壁)

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 炭化物少量・焼土極微量を含む 良く締まる

SX2 (外周西壁)

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 炭化物微量を含み、褐色 (10YR4/4) 粘土が斑に多量混じる 良く締まる
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 焼土少量・炭化物微量を含み、褐色 (10YR4/4) 粘土が斑に、層上部に黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土が混じる 良く締まる
- 3 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 炭化物少量を含み、褐色 (10YR4/4) 粘土がブロック状に混じる 良く締まる
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 焼土・炭化物微量を含む 良く締まる

SX2_SK1

- 5 黒褐色 (10YR3/2) 粘土 炭化物微量を含む 良く締まる
- 6 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土がブロック状に混じる 良く締まる

SX2_SK3

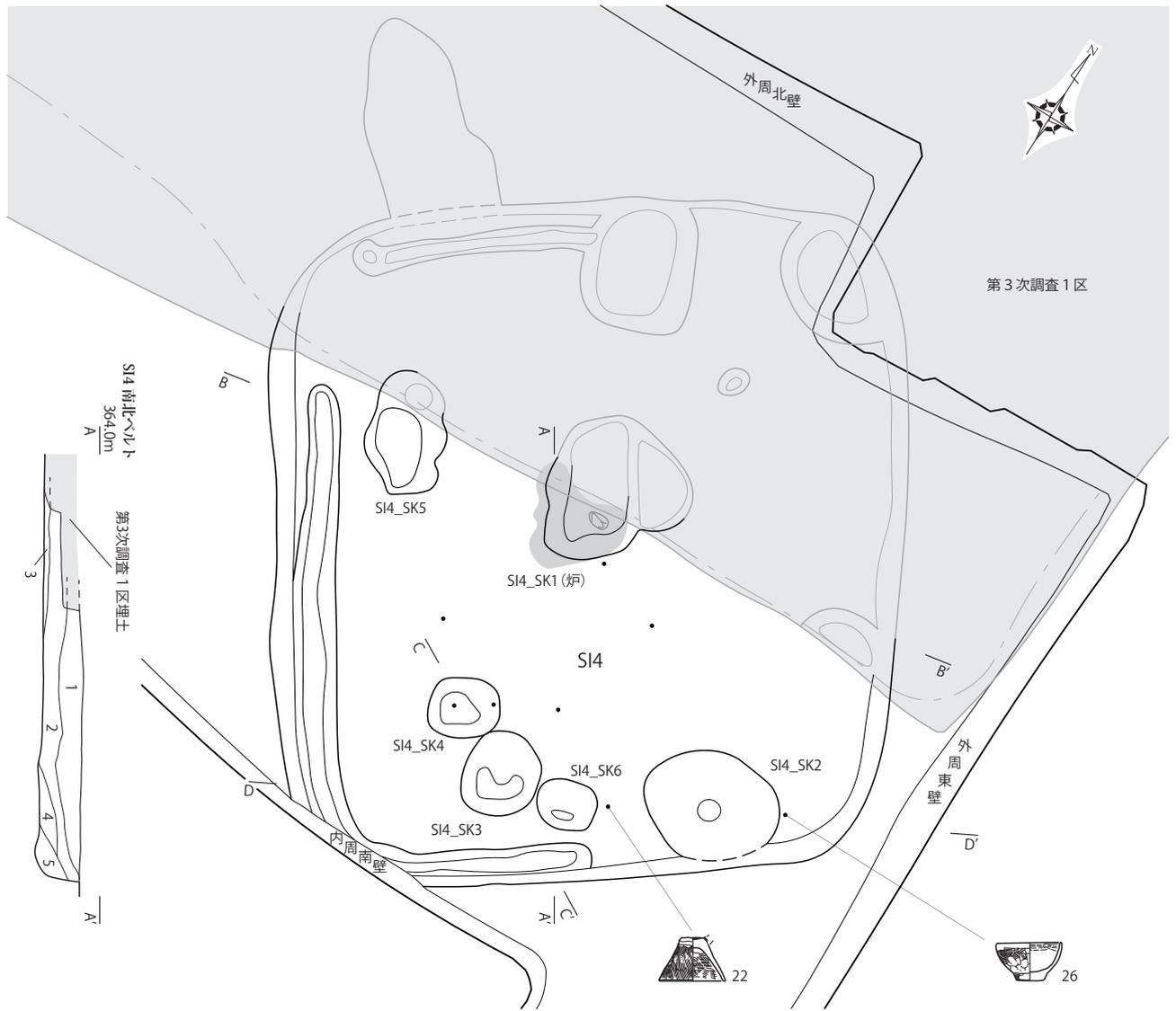
- 7 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質粘土が斑に混じる 良く締まる

SX2_SK2 エレベーション図



(平面配置図、SX1・2壁断面図)

第10図 SI3、SX1・2(2)

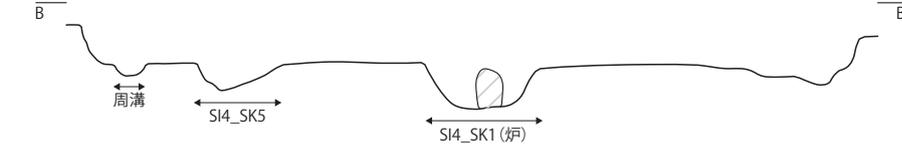


SI4 南北ベルト

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土 焼土・炭化物少量を含み、褐色 (10YR4/4) 粘土がブロック状に混じる 良く締まる
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土 焼土少量・炭化物極微量を含み、にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土が斑に混じる 良く締まる
- 3 黒褐色 (10YR2/3) 粘土 焼土微量を含む 良く締まる
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土 焼土少量・炭化物極微量を含み、にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土が斑に混じる 良く締まる
- 5 黒色 (10YR2/1) 粘土 炭化物微量を含み、にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土が斑に混じる 良く締まる

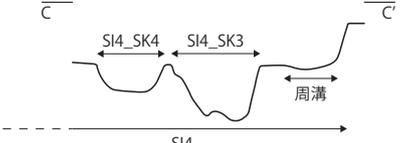
SI4 周溝、SI4_SK1・5 エレベーション図

364.0m



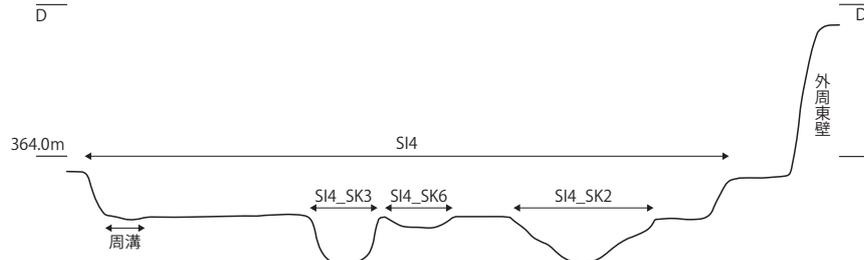
SI4_SK3・4 エレベーション図

364.0m



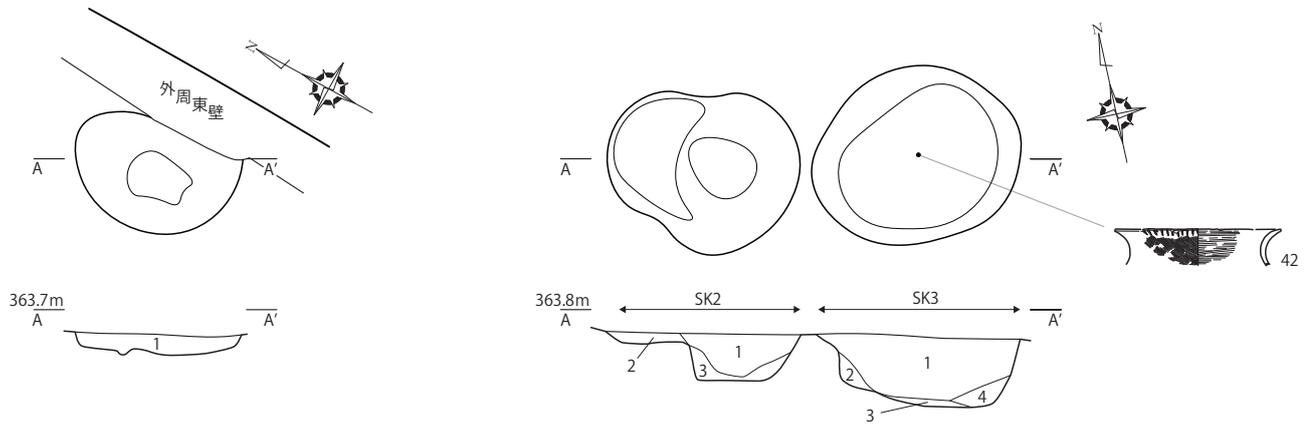
SI4_SK2・3・6 エレベーション図

365.0m



(平面配置図、ベルト断面図、エレベーション図)

第11図 SI4



SK1

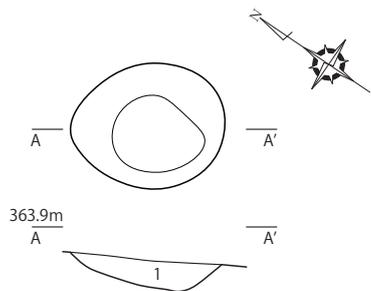
- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
炭化物極微量・白色極粗粒砂微量を含み、
褐色 (10YR4/4) シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる

SK2

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
炭化物極微量・白色極粗粒砂微量を含み、
にぶい黄橙色 (10YR7/4) シルトがブロック状に混じる
良く締まる
- 2 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
白色極粗粒砂微量を含み、
褐色 (10YR4/4) シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 良く締まる

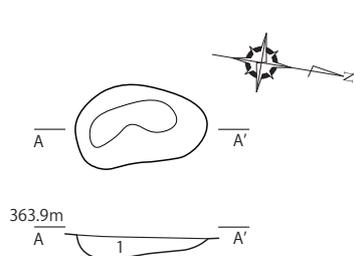
SK3

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
炭化物・白色極粗粒砂を微量含み、
にぶい黄橙色 (10YR7/4) シルトがブロック状に混じる
良く締まる
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土 良く締まる
- 3 2層と同じ
- 4 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
褐色 (10YR4/4) シルトが斑に混じる
良く締まる



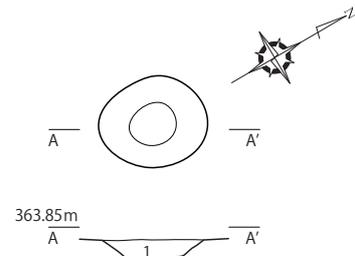
SK4

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
炭化物極微量・白色粗粒砂微量を含み、
にぶい黄橙色 (10YR7/4) シルトがブロック状に混じる
良く締まる



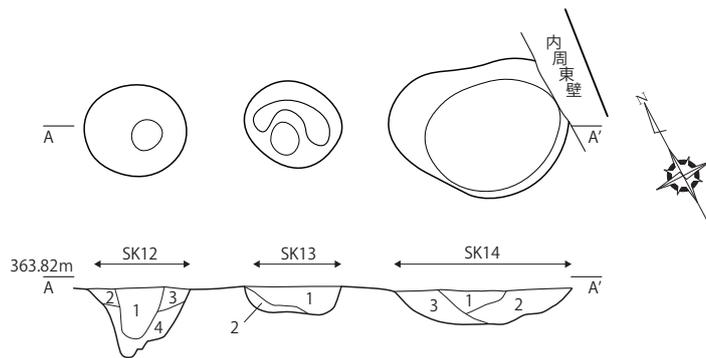
SK5

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
炭化物極微量・白色極粗粒砂微量を含む
良く締まる



SK6

- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土
白色極粗粒砂微量を含む 良く締まる



SK12

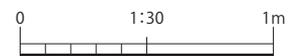
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘土
にぶい黄橙色 (10YR7/3) シルトがブロック状に混じる 良く締まる
- 2 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土
炭化物極微量を含む 良く締まる
- 3 2層と同じ
- 4 黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土
褐色 (10YR4/4) シルトがブロック状に混じる 良く締まる

SK13

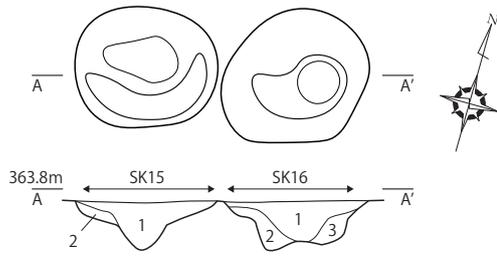
- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
炭化物極微量を含み、暗褐色 (10YR3/4) 粘土が斑に混じる
良く締まる
- 2 暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土
褐色 (10YR4/4) シルト質粘土が斑に混じる 良く締まる

SK14

- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘土
炭化物極微量を含み、
にぶい黄橙色 (10YR7/3) シルトがブロック状に混じる 良く締まる
- 2 暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土
褐色 (10YR4/4) シルト質粘土がブロック状に混じる 良く締まる
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
炭化物極微量を含み、黒褐色 (10YR2/2) シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる



第12図 SK1~6・12~14

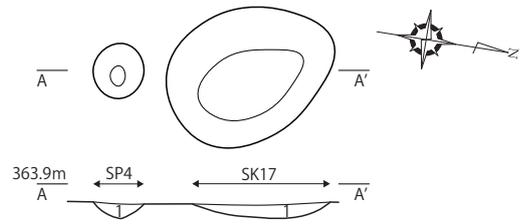


SK15

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる
- 2 褐色 (10YR4/4) シルト質粘土
黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる

SK16

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
炭化物極微量を含む 良く締まる
- 2 褐色 (10YR4/4) シルト質粘土
暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土が斑に混じる
良く締まる
- 3 2層と同じ

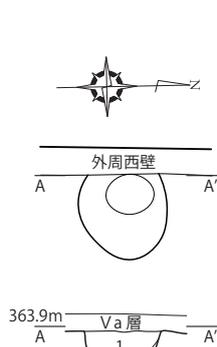


SP4

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
にぶい黄褐色 (10YR7/3) シルトがブロック状に混じる 良く締まる

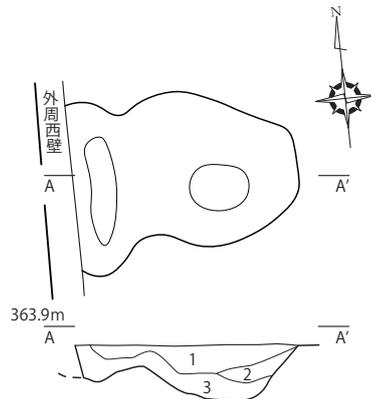
SK17

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
炭化物極微量を含み、褐色 (10YR2/2) 粘土が斑に混じる
良く締まる



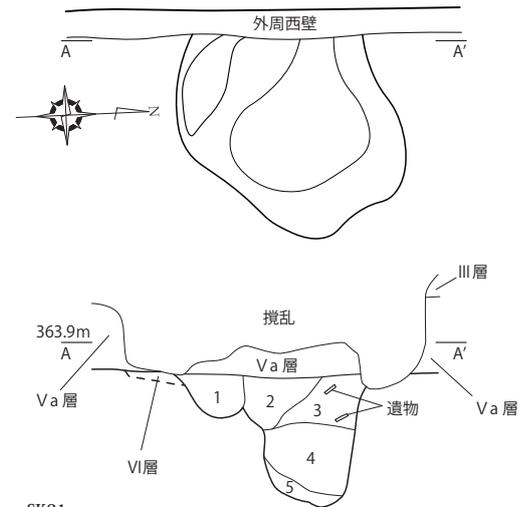
SK18

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土
炭化物極微量を含む 良く締まる
- 2 暗褐色 (10YR3/3) 粘土
褐色 (10YR4/4) 粘土が斑に混じる
良く締まる



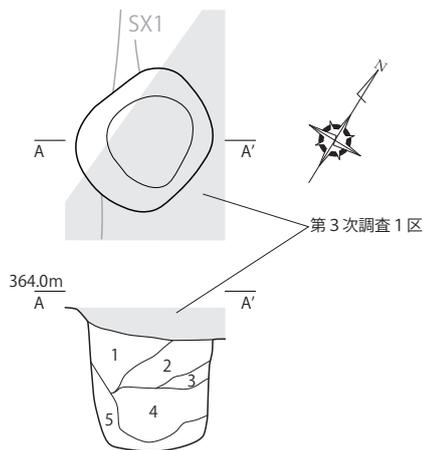
SK19

- 1 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土
浅黄褐色 (10YR8/3) 粘土がブロック状に混じる
良く締まる
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質粘土 良く締まる
- 3 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土が斑に混じる
良く締まる



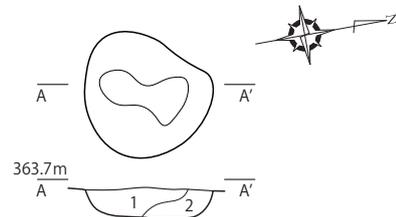
SK21

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
焼土極微量を含む 良く締まる
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質粘土
にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト質粘土が斑に混じる 良く締まる
- 3 暗褐色 (10YR3/4) シルト質粘土
焼土少量を含み、褐灰色 (10YR5/1) シルトが
ブロック状に混じる 良く締まる
- 4 黒褐色 (10YR2/2) 粘土
焼土・炭化物微量を含み 良く締まる
- 5 黒褐色 (10YR2/2) 粘土
炭化物少量を含み、にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト質粘土が
斑に混じる 良く締まる



SK23

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘土
褐色 (10YR4/6) 粘土・にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト質粘土がブロック状に混じる
非常に良く締まる
- 2 黒褐色 (10YR3/1) シルト質粘土
炭化物極微量を含み、暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土が斑に混じる 良く締まる
- 3 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土 良く締まる
- 4 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
褐色 (10YR4/6) シルト質粘土が斑に混じる 締まりゆい
- 5 黒褐色 (10YR3/1) 粘土
にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト質粘土がブロック状に混じる 良く締まる

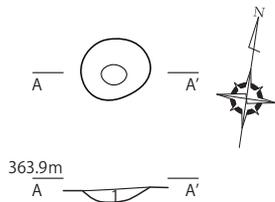


SK24

- 1 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土
焼土微量を含み 良く締まる
- 2 黄褐色 (10YR5/6) シルト質粘土
黒褐色 (10YR3/1) 粘土がブロック状に混じる 良く締まる

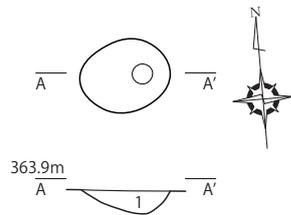


第13図 SK15~19・21・23・24、SP4



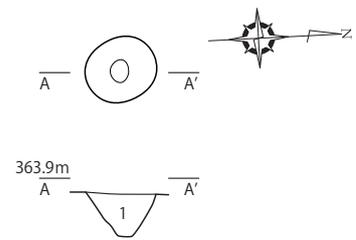
SP1

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 粘土
炭化物極々微量・白色極粗粒砂微量を含み、
にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルトがブロック状に混じる
良く締まる



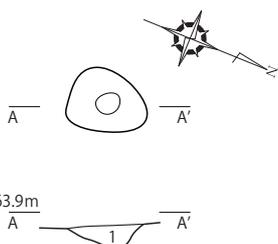
SP2

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
白色極粗粒砂を少量含み、
にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルトがブロック状に混じる
良く締まる



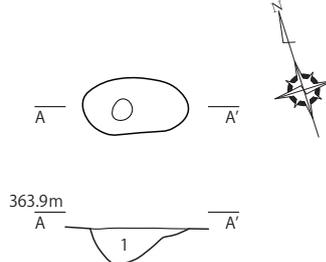
SP3

- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土
炭化物極々微量・白色粗粒砂微量を含み、
にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルトがブロック状に混じる
良く締まる



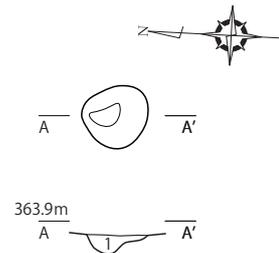
SP5

- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
炭化物極微量・焼土微量を含み、
灰白色 (10YR7/1) 粘土がブロック状に混じる
良く締まる



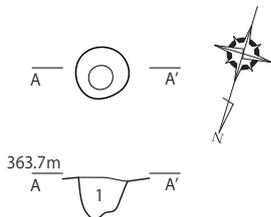
SP6

- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土
炭化物極微量を含み、
暗褐色 (10YR3/3) 粘土が斑に混じる
良く締まる



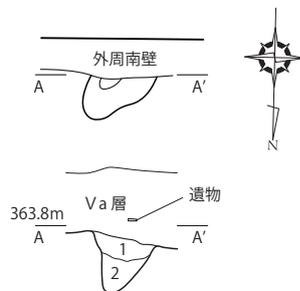
SP7

- 1 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質粘土
炭化物微量を含み、
にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土が斑に混じる
良く締まる



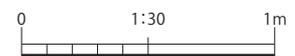
SP8

- 1 褐灰色 (10YR4/1) シルト質粘土
褐色 (10YR4/4) 粘土がブロック状に混じる
良く締まる



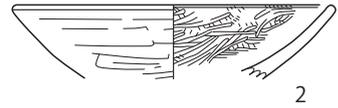
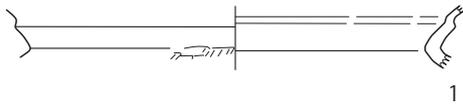
SP9

- 1 暗褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
炭化物微量を含む
良く締まる
2 暗褐色 (10YR3/2) シルト質粘土
褐色 (10YR4/4) 粘土が斑に混じる
良く締まる

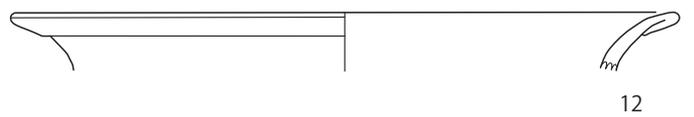
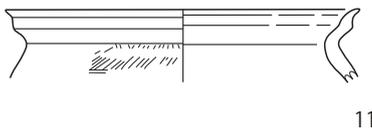
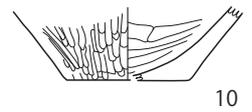
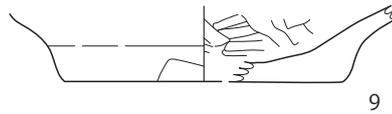
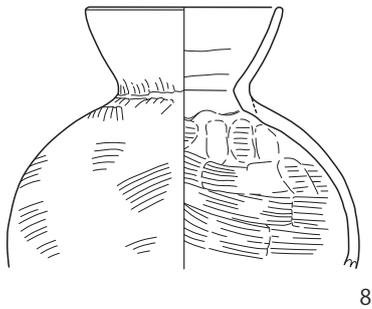
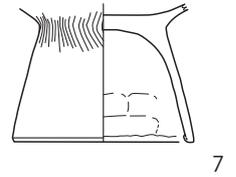
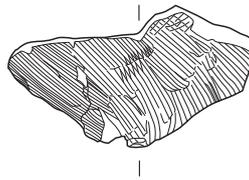
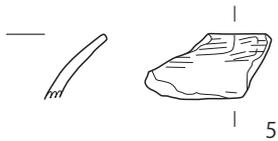
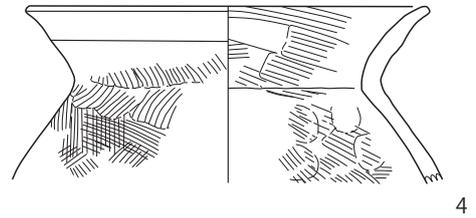
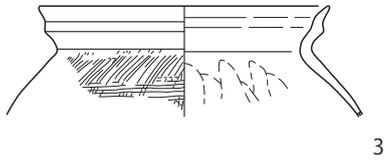


第14図 SP1~3・5~9

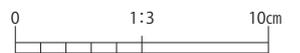
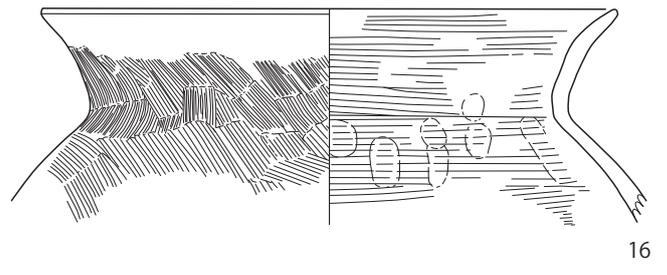
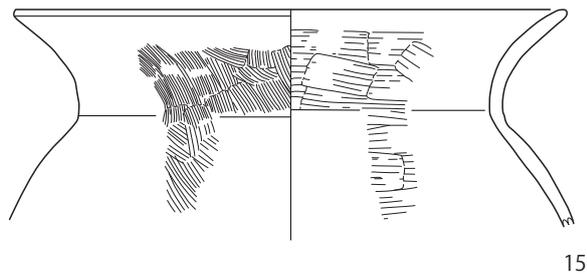
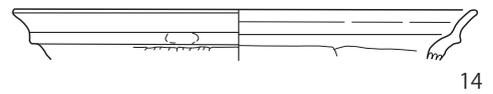
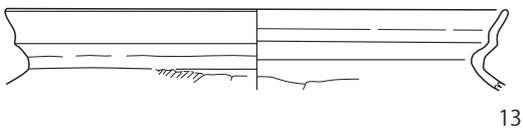
SI1



SI2

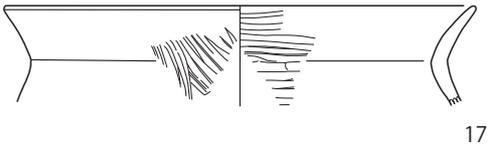


SI3

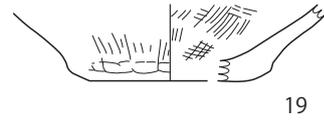


第15図 遺構出土遺物(1)

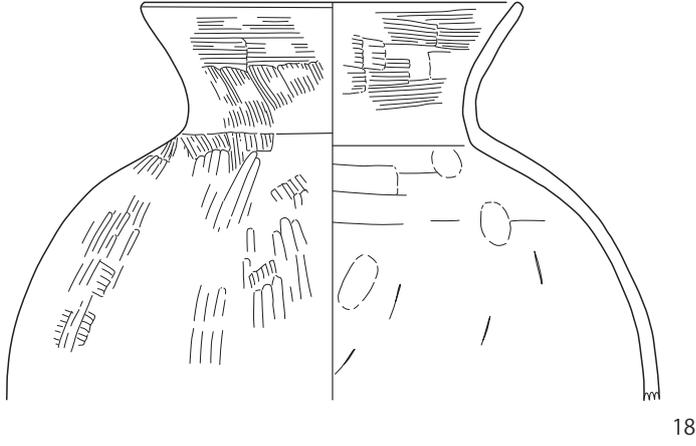
S13



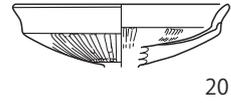
17



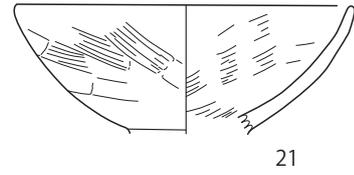
19



18

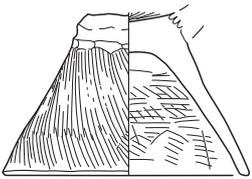


20

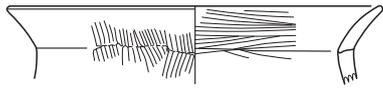


21

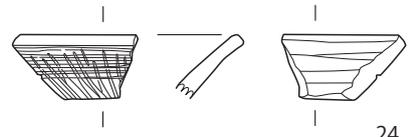
S14



22



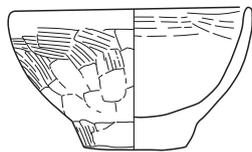
23



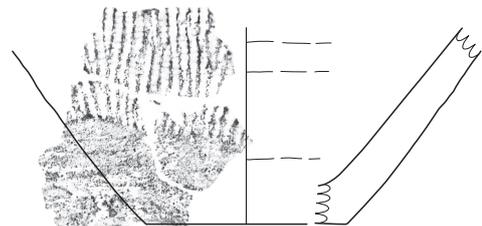
24



25



26



27

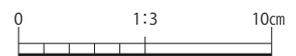
SX1



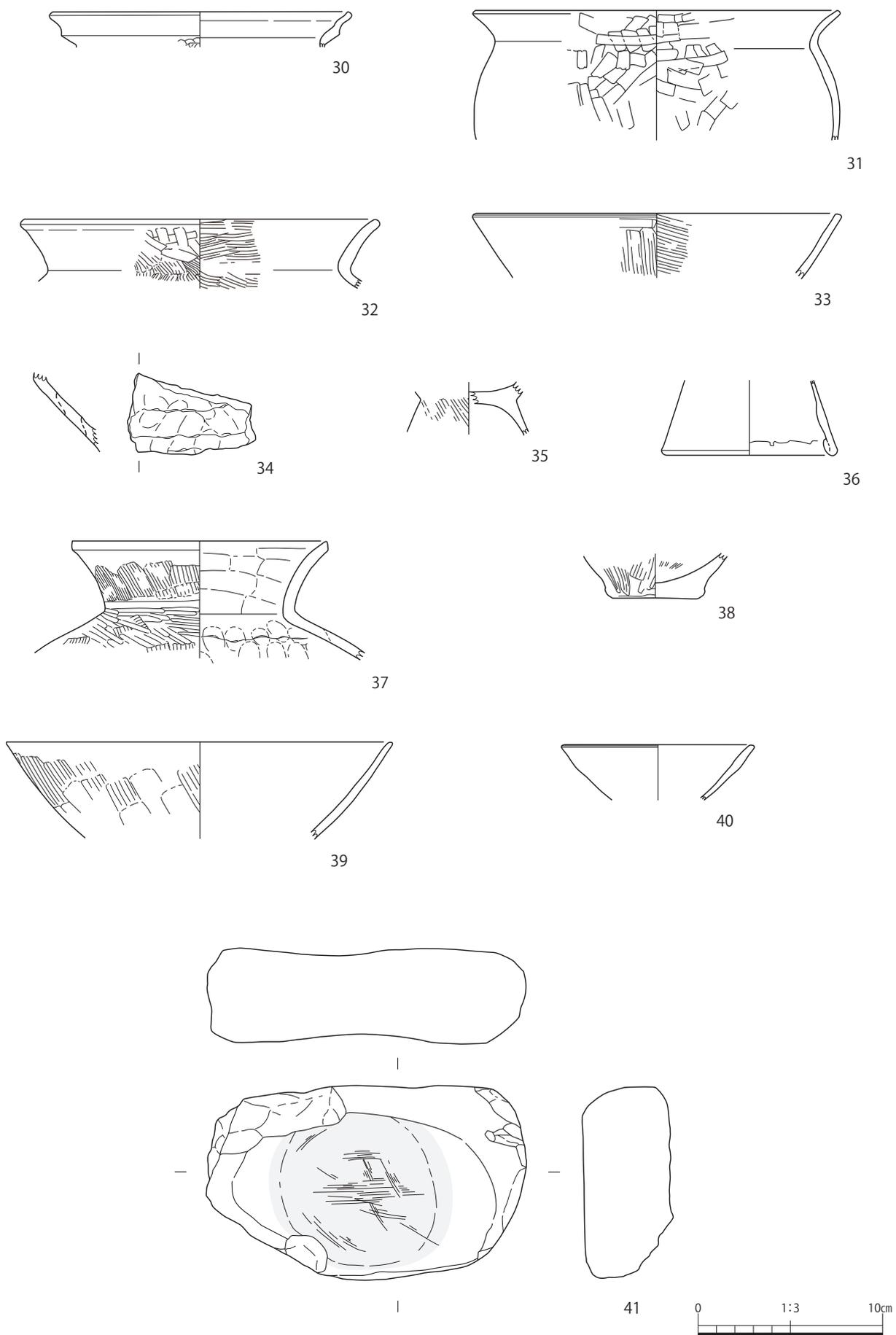
28



29

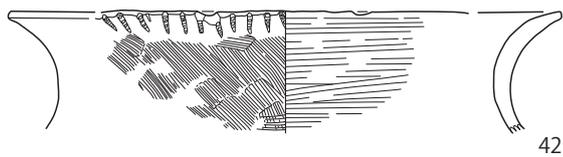


第16図 遺構出土遺物(2)



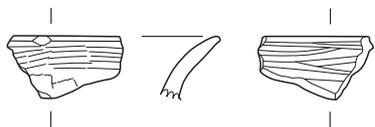
第 17 図 遺構出土遺物 (3)

SK3

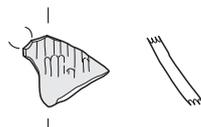


42

SK21

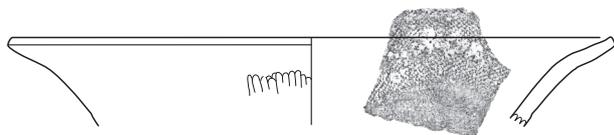


43



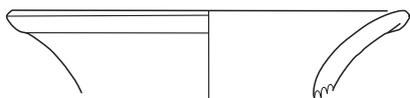
44

SK24



45

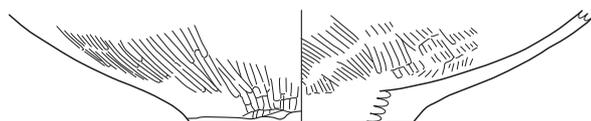
遺構外出土遺物



46



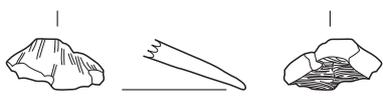
47



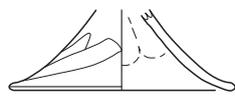
48



49



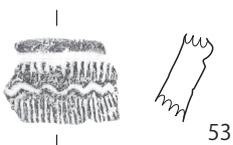
50



51



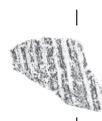
52



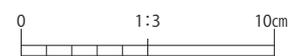
53



54



55



第 18 図 遺構出土遺物 (4)、遺構外出土遺物

第2表 遺物観察表1 (土師器・縄文土器) 1

報告 番号	写真 図版	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位		整形・調整技法		胎土色調		胎土含有物	焼成	備考	推定年代
					A	B	C	内面(裏面)	外面(表面)	底部	内面	外面					
					胎土含有物		焼成	備考	推定年代								
1	15	9	S11	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(2.5)		口縁小	ナデ	ハケ・ナデ	ヘラケズリ	縹 5YR6/8	縹 7.5YR6/3	長石、石英、雲母	良好		古墳前期 4C後~5C前	
2	15	9	S11	土師器 高坏	(3.0)	(12.0)	口縁1/6	ハケ・ミガキ	ヘラケズリ		縹 5YR6/6	縹 5YR6/6	長石、石英、雲母	良好		古墳前期	
3	15	9	S12	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(4.4)	(11.4)	口縁1/4	ナデ・指頭痕	ハケ・ナデ		縹 7.5YR6/6	縹 7.5YR6/6	長石、石英、雲母	良好	肩部横ハケ (S字状口縁台付甕B類)	古墳前期 4C中葉	
4	15	9	S12	土師器 甕	(7.1)	(15.8)	口縁部~体部	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	縹 7.5YR6/4	縹 7.5YR6/4	粗砂粒、雲母、白・黒色粒	良好		古墳前期 4C中葉	
5	15	9	S12	土師器 甕	(2.6)		口縁小	ハケ			縹 5YR6/6	縹 5YR6/6	長石、雲母、白・赤褐色粒	良好		古墳前期	
6	15	9	S12	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(5.6)		体部小	ナデ	ハケ		縹 7.5YR6/4	縹 7.5YR6/4	長石、石英、雲母、砂礫含む	良好		古墳前期	
7	15	9	S12	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(5.5)	(7.2)	脚台部	ナデ	ハケメ	ハケメ	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6		良好	脚台端折返し	古墳前期	
8	15	9	S12	土師器 壺	(10.4)	(7.6)	口縁部~体部	指頭痕	ハケメ・輪積痕	ハケメ	縹 5YR6/6	縹 5YR6/6		良好		古墳前期 4C中葉	
9	15	9	S12	土師器 壺	(3.0)	(11.0)	底部1/4	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	縹 7.5YR6/6	縹 7.5YR6/6	長石、雲母、白・赤褐色粒、砂礫含む	良好	底部のヘラケズリはミガキに近く滑らか	古墳前期	
10	15	9	S12	土師器 鉢	(2.9)	(4.8)	体部小~底部1/4	ヘラミガキ		ヘラケズリ	縹 7.5YR6/4	縹 7.5YR6/4	長石、石英、雲母	良好		古墳前期 4C後か	
11	15	9	S12	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(2.9)	(14.0)	口縁小	ナデ	ハケ・ナデ		縹 7.5YR6/4	縹 7.5YR7/6	長石、石英、雲母	良好	SI2_SK1(9)より出土 肩部横ハケ (S字状口縁台付甕B類)	古墳前期 4C中葉	
12	15	9	S12	土師器 壺	(2.3)	(26.0)	口縁小	ナデ	ナデ		縹 5YR6/6	縹 5YR6/6	長石、石英、雲母	良好	SI2_SK1(9)より出土 折返し口縁	古墳前期 4C中葉か	
13	15	9	S13	土師器 台付甕 (S字状口縁)	3.2	19.8	口縁部	ナデ	縦ハケメ・ナデ		明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	粗砂粒、白色粒、雲母	良好		古墳前期	
14	15	9	S13	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(2.0)	18.8	口縁部	ナデ	ハケメ・ナデ 指頭痕		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	細砂粒、白色粒、雲母	良好		古墳前期	
15	15	9	S13	土師器 甕	(8.7)	(21.8)	口縁部~体部	ハケメ	ハケメ・ナデ		縹 7.5YR6/6	縹 7.5YR6/6	粗砂粒、白・赤色粒、雲母	良好	SI3_SK4より出土、ハケ3種 外面頭部を縦ハケ(小上)・中(下)使い分け	古墳前期 4C後~5C前	
16	15	9	S13	土師器 甕	(8.5)	(22.8)	口縁1/4~体部	縦ハケメ 指頭痕	縦ハケメ・ナデ		縹 7.5YR6/6	縹 7.5YR6/6	粗砂粒、白・赤色粒、雲母	良好	ハケ3種 外面頭部を縦ハケ(小上)・中(下)使い分け	古墳前期 4C後~5C前	
17	16	9	S13	土師器 甕	(3.0)	18.6	口縁部	縦ハケメ	縦ハケメ・ナデ		縹 5YR5/4	縹 5YR5/4	細砂粒、白色粒	良好		古墳前期 4C中葉か	
18	16	9	S13	土師器 壺	(15.8)	(14.8)	口縁~体部	指頭痕	ハケ後ヘラナデ 指頭痕		縹 5YR6/6	縹 5YR6/6	粗砂粒、白・赤色粒、雲母	良好	SI3_SK1より出土 体部外面の一部で黒色化(煤か)	古墳前期 4C後~5C前	
19	16	10	S13	土師器 壺	(8.0)		底部	ハケ後ナデ	縦ハケメ		縹 5YR6/6	縹 5YR6/6	粗砂粒、白・赤色粒、雲母	良好		古墳前期	
20	16	10	S13	土師器 器台	(2.5)	(8.4)	口縁~体部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ		縹 5YR6/6	縹 5YR6/6	細砂粒、赤色粒	良好	口縁積み痕	古墳前期 4C後~5C前	
21	16	10	S13	土師器 高坏	(5.1)	13.3	口縁~体部	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ		明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	細砂粒、白・黒色粒、雲母	良好	SI3_SK1より出土 摩滅顕著	古墳前期 4C末か	
22	16	10	S14	土師器 台付甕	(6.5)	(9.8)	脚台部	縦ハケメ	縦ハケメ		明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6	粗砂粒、白色粒、雲母	良好	一部黒色化(煤付着か)	古墳前期	
23	16	10	S14	土師器 甕	(3.1)	(14.8)	口縁部	縦ハケメ	縦ハケメ		縹 7.5YR3/2	縹 7.5YR3/2	粗砂粒、白色粒	良好	輪積痕	古墳前期 4C中葉か	
24	16	10	S14	土師器 壺	(2.6)		口縁小	ナデ	縦ハケ後横ハケ		明赤褐 5YR3/2	明赤褐 2.5YR5/3	粗砂粒、白色粒、雲母	良好	縦ハケに比し横ハケは目分細かく長い円運動、 遺物片の大きさに対し重い胎土密度極めて高い	古墳前期 4C中葉か	
25	16	10	S14	土師器 高坏	(3.5)	(21.0)	脚部	ナデ	ミガキ		縹 7.5YR7/6	縹 7.5YR7/6	粗砂粒、白色粒	良好	摩滅顕著	古墳前期	
26	16	10	S14	土師器 手捏土器	4.1	9.2	口縁部	縦ハケメ	ハケ後 ヘラケズリ		縹 7.5YR7/4	縹 7.5YR7/4	粗砂粒、白色粒、雲母	良好	埴形、高台外面の一部で黒色化顕著 ヘラケズリは滑らかでミガキに近い、内面剥離顕著	古墳前期	
27	16	10	S14	縄文土器 深鉢	(7.7)	(8.0)	体部~底部	ナデ			赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6	粗砂粒、白色粒	良好	地文縄文(単節)	縄文中期中葉	
28	16	10	SX1	土師器 高坏	(3.0)	(11.0)	口縁1/4	ヘラミガキ	ヘラケズリ		縹 5YR7/6	縹 5YR7/6	石英、赤色粒	良好		古墳前期	
29	16	10	SX1	土師器 手捏土器	(4.0)	(7.2)	口縁~底部小	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕		灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	長石、白・赤色粒、雲母	良好	埴が鉢型	古墳前期	
30	17	10	SX2	土師器 台付甕 (S字状口縁)	(1.9)	(16.0)	口縁小	ナデ	ハケ・ナデ		縹 7.5YR7/6	縹 7.5YR7/6	長石、石英、白・赤色粒 雲母	良好		古墳前期	

*法量()は独立表測値、()は既存値である。

第3表 遺物観察表2 (土師器・縄文土器) 2

報告 番号	写真 図版	出土地点	種別	器形	法量(cm)			部位	整形・調整技法		胎土色調		焼成	備考	推定年代
					A	B	C		内面(裏面)	外面(表面)	内面	外面			
31	17	10	SK2	土師器	甕	(19.6)		(7.1)	口縁小~体部小 ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	橙 2.5YR6/6	橙 5YR6/6	良好	外面摩滅顕著	古墳前期 4C中~5C前
32	17	10	SK2	土師器	甕	(19.0)		(3.0)	口縁小 縦ハケ・ヘラナ デ・輪積痕	縦ハケ・ヘラナ デ・輪積痕	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好		古墳前期 4C中葉
33	17	10	SK2	土師器	甕か	(19.4)		(3.5)	口縁小 縦ハケ	縦ハケ	にぶい 7.5YR7/4	にぶい 7.5YR7/4	良好		古墳前期
34	17	10	SK2	土師器	甕			(4.3)	体部小 輪積痕・指頭痕	ナデ	にぶい 7.5YR7/4	橙 7.5YR6/6	良好		古墳前期
35	17	10	SK2	土師器	台付甕 (S字状口縁)			(2.9)	脚部(接合部) ナデ	ナメハケ	明赤 7.5YR5/6	明赤 7.5YR5/6	良好	内面の黒変顕著	古墳前期
36	17	10	SK2	土師器	台付甕 (S字状口縁)			(4.1)	脚部1/4 ナデ	ナデ	にぶい 5YR6/4	にぶい 5YR5/4	良好		
37	17	10	SK2	土師器	壺	(16.8)		(6.5)	口縁~体部 指頭痕・輪積痕	ヘラナデ 指頭痕・輪積痕	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好	ハケ2種の使い分け 外面頭部より上をハケ中・体部はハケ大	古墳前期 4C中~5C前
38	17	11	SK2	土師器	壺			(2.4)	底部1/2 ミガキ	ハケ・ヘラケズリ ヘラケズリ	にぶい 7.5YR7/4	にぶい 7.5YR7/4	良好		古墳前期
39	17	11	SK2	土師器	高坏	(21.0)		(5.3)	口縁部~体部 ヘラナデ	ヘラナデ	明赤 2.5YR5/6	明赤 2.5YR5/6	良好	摩滅顕著	古墳前期 4C中葉か
40	17	11	SK2	土師器	高坏	(10.0)		(3.0)	口縁1/8 ナデ	ナデ	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	良好	摩滅顕著	
42	18	11	SK3	土師器	甕	(11.8)		(4.9)	口縁部 縦ハケ後ナデ	縦ハケ後ナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好	口縁部に磨状工具による割突文(刻目) ハケ3種(外面上部小・外面体部中・内面大)	古墳前期 4C中~5C前か
43	18	11	SK21	土師器	甕か			(2.5)	口縁部小 ヘラナデ	ヘラナデ	明赤 5YR3/2	明赤 5YR3/2	良好		古墳前期
44	18	11	SK21	土師器	高坏			(2.8)	脚部 ナデ	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	良好	透孔一ヶ所残存 外面赤色塗彩痕	古墳前期
45	18	11	SK24	土師器	壺	(23.6)		(3.5)	口縁部 布目・ナデ	ミガキ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好		
46	18	11	道緒外 (建物包含層)	土師器	壺	(15.6)		(3.6)	口縁 ナデ	ナデ	明赤 5YR5/6	明赤 5YR5/6	良好	折返し口縁 摩滅顕著	古墳前期 4C中葉か
47	18	11	道緒外 (建物包含層)	土師器	壺	(13.0)		(1.3)	口縁小 ヘラナデ	ヘラナデ	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好	有段口縁 口縁部に磨状工具による割突文(刻目)	古墳前期 4C中葉
48	18	11	道緒外 (建物包含層)	土師器	壺			(8.8)	底部 ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい 2.5YR4/6	にぶい 2.5YR4/6	良好		古墳前期
49	18	11	道緒外 (建物包含層)	土師器	高坏	(7.0)		(1.9)	口縁小 回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	良好		古墳中期初頭 5C前~中か
50	18	11	道緒外 (建物包含層)	土師器	高坏			(2.0)	脚部小 ハケ	ハケ	にぶい 7.5YR7/4	にぶい 7.5YR7/4	良好	穿孔あり 外面赤色塗彩	古墳前期 4C中葉か
51	18	11	道緒外 (建物包含層)	土師器	高坏			(8.6)	脚部小 指頭痕	指頭痕	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	良好	摩滅顕著	古墳前期
52	18	11	道緒外 (建物包含層)	土師器	高坏			(2.0)	脚部小 横ハケ	横ハケ	赤 10R5/6	赤 10R5/6	良好	外面赤色塗彩痕	
53	18	11	道緒外 (建物包含層)	縄文土器	深鉢			(3.5)	口縁小 ナデ	ナデ	明赤 5YR5/6	明赤 5YR5/6	良好	地文条線文 横立波状線	縄文中期中葉 勝坂(勝内1)
54	18	11	道緒外 (建物包含層)	縄文土器	深鉢			(4.2)	体部 ナデ	ナデ	明赤 5YR5/6	明赤 5YR5/6	良好	波線による三角区画線か	縄文中期初頭 五瀬ヶ台1
55	18	11	道緒外 (建物包含層)	縄文土器	深鉢			(2.6)	体部小 ナデ	ナデ	赤 5YR4/6	明赤 5YR4/6	良好	地文条線文	縄文中期初頭 五瀬ヶ台

*法量()は復元実測値、()は残存値である。

第4表 遺物観察表3 (石器)

報告 番号	写真 図版	出土地点	分類1	分類2	法量(cm)			重量(g)	特徴・備考
					A	B	C		
41	17	11	SK2	砥石	17.4	10.7	5.2	1.418	磨り方向は砥石長軸を主とする

*法量()は復元実測値、()は残存値である。

第5章 総括

今回の調査で検出した遺構は、すべて古墳時代前期後半に属するものであった。このうちの竪穴住居に関していくつか取り上げる。

第1節 SX1の性格について

遺構SX1は検出規模が狭小であり直線的な遺構プランから当初は溝を想定するも、重複する第3次調査1区に報告が無いため第4章においては性格不明遺構のままとした。しかし、いくつかの特徴からある可能性が考えられる。

本遺構は、第3次調査一区重複部においては地山まで削平され完全に消失していたが、当時の西側調査区外に該当する位置にて、明確な立ち上がりを検出し、少なくとも遺構西端においては皿形の断面形状をしていることを確認した。また、狭小でありながらも埋土から高坏部や完形に近い手捏ね土器、壺の小片が出土している。遺構底部はSI1やSX2と同程度の硬化度合いを見せるため、人為的にたたき締められた床面と言って良いかもしれない。遺構確認面から遺構底部（床面）までは深さ12cmとやや浅いが、検出状況などからN-30°-Wを主軸とする竪穴住居である可能性が考えられ、時期的にはSI4に後続することが想定される。

第4章第3節の冒頭で述べたサブトレンチ状の掘削痕から、当時においても一旦は遺構プランとして平面上で把握したものと思われる。しかしながら、SI4（=1号住居址：第3次調査1区）のような貼床状の明確な硬化面を持たない遺構底部や浅い遺構深度、包含層と同質（やや黒色化）の土壤に埋没していることなどから、サブトレンチにより堆積状況を確認しつつも、窪地のような自然地形と判断されたのではないだろうか。

SX1が竪穴住居であったとした場合、本調査による検出規模は恐らく3%にも満たないことから、第4章の事実記載では竪穴住居と明記することは避け「性格不明遺構」のまま報告したが、ここにSX1の持つ可能性の一つとして提示し、同事業地内で三度目となる発掘調査が今後実施された際には、その性格が解明されることを期待する。

第2節 検出した竪穴住居についての各所見（第19～21図、第5表）

SI1は、著しい攪乱の影響や検出位置の不運が重なり、たたき締められた床面と焼土溜まりを確認するも、検出は全体の極一部のため炉や貯蔵穴といった施設を検出するに至らなかったが、N-21°-Eを主軸とする方形であることを把握することができた。出土したD類のS字甕から、遺構時期は4世紀後葉から5世紀前葉であろうか。

SI2は、N-24°-Wを主軸とする隅丸方形または長方形で、北側に舌状の突出部を有し、床は粗粒砂を混ぜた粘質土を強固にたたき締めた貼床状である。住居内からは土坑2基と小穴1基を検出し、住居中央やや北寄りに位置する土坑SI2_SK1は床面を掘り窪めた地床炉である。また、北寄り（舌状の突出部の根本）に位置するSI2_SK2は貯蔵穴的な性格を有する可能性がある。小穴は検出位置から柱穴であろう。本遺構からはB類のS字甕や直口壺・折り返し口縁壺が出土していることから、遺構時期は4世紀中葉と推定しており、今回の調査で検出した遺構で最も先行するものの一つであると考えている。舌状突出部は完掘後の平面形状や位置からカマドに似るも、焼土・炭化物の明確な溜まりは認められず、遺物から推定できる遺構時期も県内でのカマド発生以前である。第3次調査で確認された1号住居址（本調査検出のSI4）においても同様の突出部が見られるため住居施設の一部と考えたいが、性格の解明には至らなかった。

SI3は、N-29°-Wを主軸とする隅丸方形で、床は粗粒砂を混ぜた粘質土を強固にたたき締めた貼床状である。住居内からは周溝と土坑3基を検出した。住居中央やや北寄りに位置する土坑SI3_SK3は

床面を浅く掘り窪めたもので、焼土・炭化物が集中することや、位置関係から地床炉と言える。S I 3_ S K 2は長軸51cm短軸33cmの平面楕円形で、断面逆台形の深さ43cmを測り、炉の脇に位置することから貯蔵穴と考えて良いであろう。住居東壁沿いに位置するS I 3_ S K 1も貯蔵穴と考えたい。また、住居南壁中央付近に位置する小穴を伴う窪みは、梯子ないし階段状の昇降器具を用いた住居の出入口部と考えられ、第2次調査でも同様の小穴が確認された事例がある。D類のS字甕や3種のハケ調整が認められる甕、器台などが出土していることから、遺構時期は4世紀後葉から5世紀前葉と推定している。

S I 4は、N-32°-Wを主軸とする隅丸長方形で、S I 2と同様な舌状突出部を北側に有し、床は粗粒砂を混ぜた粘質土を強固にたたき締めた貼床状である。また、住居内南西コーナーを中心に「L」字をした周溝状の窪みが認められた。床面からは土坑6基を検出しており、第3次調査検出遺構の延伸部に当たる土坑S I 4_ S K 1は、床面を掘り窪めた地床炉で住居中央やや北寄りに位置する。枕石と考えられる25.1cm×15.2cm×7.3cmの石が炉の最深部に立位で埋没しており、住居廃絶時の祭祀行為として枕石を起立させた可能性がある。住居中央西寄りに位置するS I 4_ S K 5や、住居南寄りに位置するS I 4_ S K 2～4は貯蔵穴と考えられるが、S I 4_ S K 6は小さく浅いため性格は不明。特に南寄りの貯蔵穴の位置関係から、住居入口はS I 4_ S K 2とS I 4_ S K 6の間に位置していたと推定している。今回の調査で出土した甕や高坏、第3次調査の成果などから、遺構時期は4世紀中葉と考えられる。

S X 2は、検出は住居隅部分の一部に過ぎないが、N-33°-Wを主軸とする隅丸方形で、床はやや硬化している。住居内から検出した3基の土坑は貯蔵穴と考えられ、特に住居南寄りに位置する土坑S X 2_ S K 2は他の住居内土坑より遺物量が多く、唯一石器が出土した遺構である。他の住居に比して、床面の硬化度合いが低い場合、使用期間が短い可能性がある。遺構時期は、2種のハケ調整が認められる甕や高坏、S I 3との重複関係などから、4世紀中葉から後葉を考えている。検出した住居のうち、比較的早い段階のものであるため、硬化度合い低い床面は、あるいは構築技術が未熟な段階にあったとも受け取れるが、縄文時代より人の生活が認められる本地域では考えにくく、時期的に先行するS I 2に施された砂を混ぜた粘土による強固な床面と矛盾する。これら竪穴住居の所見をまとめたのが第5表である。

第5表 竪穴住居観察表

* () は検出部の計測最大値である。

遺構名	主軸方位	平面形状	検出規模	主軸 (m)	交差軸 (m)	深さ (cm)	住居施設					年代
							床面	炉	貯蔵穴	柱穴	その他	
S I 1	N-21°-E	方形か	10%	<1.12>	<2.02>	21	やや硬化	-	-	-	-	4c後葉～5c前葉
S I 2	N-24°-W	隅丸方形か	40%	4.81	<2.34>	28	貼床状硬化面	1	1	1	舌状突出部	4c中葉
S I 3	N-29°-W	隅丸方形	97%	4.29	4.27	19	貼床状硬化面	1	2	-	周溝・昇降口	4c後葉～5c前葉
S I 4	N-32°-W	隅丸長方形	98%	5.01	4.59	22	貼床状硬化面	1	5	-	周溝・舌状突出部	4c中葉
S X 1	N-30°-W	不明	3%	<1.51>	<0.48>	12	やや硬化	-	-	-	-	4c中葉～後葉か
S X 2	N-33°-W	隅丸方形か	20%	<1.81>	<2.73>	53	やや硬化	-	3	-	-	4c中葉～後葉

第3節 過去の調査記録の方位を参照する際の課題 (第19図、第6表)

本調査における竪穴住居の検出数は5基、第1節のようにS X 1を仮に竪穴住居するならば6基となる。総じて南北方向を主軸としつつも真北を向くことはなく東西に20°以上振れているため、主軸の振れる方位で大きく2のグループに分けて良いかもしれない。主軸が東に振れるものをグループA、西に振れるものをグループBとして分けると、グループAにはS I 1の1基が、グループBにはS I 2～4、S X 1・2の5基が属し、グループBが割合にして83%を占めた。では、これまでに西田遺跡で実施された調査で確認された竪穴住居ではどうだろうか。

昭和52年実施の第1次調査で検出された古墳時代前期の竪穴住居は7基である。このうちグループAには3基、グループBには3基が属するが、1基は耕作に伴い著しい攪乱を受けるため主軸は不明である。昭和53年実施の第2次調査で検出された古墳時代前期の竪穴住居54基である。このうちグループAには8基、グループBには46基がそれぞれ属する。平成3年に本調査と同事業地内で実施された第3次調査で検出された古墳時代前期の竪穴旧居は4基であり。このうちグループAには1基、グループBには2基が属する。残る1基はS I 4の延伸部である。

集計すると、主軸の計測が可能な古墳時代前期の竪穴住居の総数は69基で、グループAには13基が、



第6表
 竪穴住居の主軸方位一覧

調査次	遺構名	主軸方位・所属	
		グループA	グループB
1次	2住		N-10°-W
1次	3住		N-43°-W
1次	4住	N-9°-E	
1次	6住		N-25°-W
1次	7住	N-23°-E	
1次	8住	N-23°-E	
1次	9住	攪乱顕著につき不明	
2次	1住		N-4°-W
2次	2住	N-11°-E	
2次	3住		N-28°-W
2次	4住	N-35°-E	
2次	5住		N-40°-W
2次	6住		N-38°-W
2次	7住		N-37°-W
2次	8住		N-5°-W
2次	9住	N-42°-E	
2次	10住		N-10°-W
2次	11住		N-13°-W
2次	12住	N-5°-E	
2次	13住		N-34°-W
2次	14住		N-31°-W
2次	15住	N-4°-E	
2次	16住		N-17°-W
2次	17住		N-18°-W
2次	18住		N-21°-W
2次	19住	N-20°-E	
2次	20住		N-18°-W
2次	21住		N-12°-W
2次	22住		N-19°-W
2次	23住	N-3°-E	
2次	24住		N-16°-W
2次	25住		N-21°-W
2次	26住		N-21°-W
2次	27住		N-23°-W
2次	28住		N-15°-W
2次	29住		N-11°-W
2次	30住		N-21°-W
2次	31住		N-22°-W
2次	32住		N-24°-W
2次	33住	N-37°-E	
2次	34住		N-22°-W
2次	35住		N-13°-W
2次	36住		N-21°-W
2次	37住		N-12°-W
2次	38住		N-22°-W
2次	39住		N-10°-W
2次	40住		N-11°-W
2次	41住		N-10°-W
2次	42住		N-17°-W
2次	43住		N-30°-W
2次	44住		N-20°-W
2次	45住		N-18°-W
2次	46住		N-30°-W
2次	47住		N-16°-W
2次	48住		N-34°-W
2次	49住		N-20°-W
2次	50住		N-23°-W
2次	51住		N-14°-W
2次	52住		N-14°-W
2次	53住		N-38°-W
2次	54住		N-18°-W
3次	1住		本次SI4参照
3次	3住	N-5°-E	
3次	4住		N-40°-W
3次	5住		N-42°-W
本次	SI 1	N-21°-E	
本次	SI 2		N-24°-W
本次	SI 3		N-29°-W
本次	SI 4		N-32°-W
本次	SX1		N-33°-W
本次	SX2		N-30°-W

第19図 第1～3次・本次調査区配置図

グループBには56基が属することとなり、80%と圧倒的割合をグループBが占めることがわかった。平均値はグループAがN-18.3°-E、グループBはN-22.1°-Wで、主軸の振れが10°未満の住居は両グループ合わせても6基と極めて少ない。第1次調査のみA・Bの割合が等しくなったが、現状では住居形状の違い、ベッド状遺構や凸堤の有無、貯蔵穴の数、遺構時期等による法則性は残念ながら認められなかった。

これらの過去の住居の主軸方位を集計するにあたり、まず、本調査区と重複する第3次調査1区で確認された竪穴住居について計測を行ったのだが、ここで一つの問題があった。そもそも本調査での平面図と第3次調査での平面図では方位と位置にずれが生じていたのである。

本調査は、当時検出された1号住居址の延伸部を確認することも目的の一つであった。そのため、現場調査では埋め戻された1号住居址を電子平板で計測している。また、事業地範囲や道路(塩山バイパス)についても計測し、過去の図面との統合に活用した。その結果、方位磁針と平板測量により手書き実測されたであろう過去の調査図面は、磁北を北と表示していることの確証が得られた。そのため、図面統合の際に電子平板による計測図と照合し、方位については偏角6.3°で真北に振り戻し、位置については東へ約60cm、南へ約40cm修正している。30年前の図面とはいえ、1,024㎡の事業地内(南北約46m、東西約23m)でこれほどの差異が生じたことは意外であった。また、第1・2次調査の図面についても、磁北から真北へ振り戻して計測しているが、その際主軸方位が東振れから西振れへ変化したものが2基見られた。これらの差異は、調査区単体や遺構・遺物の性格、年代を把握するうえではあまり問題とはならないのかもしれないが、本調査が記録済みの遺構を再確認していることから浮き彫りとなり、数字として表れてしまったものの一つである。

このように過去の調査記録の方位を参照する際は、年代による測量手法の変化や、偏角による磁北から真北への振り戻しの有無を確認する必要がある。このことを調査員が正しく認識することが、今後の課題となる。

引用・参考文献

論文・地誌等

- 生きがい中央学級 1980『ふるさとの今昔』塩山市教育委員会
塩山市市史編さん委員会 1996『塩山市史 史料編 第一巻 原始 古代 中世』
塩山市市史編さん委員会 1998『塩山市史 通史編 下巻』
塩山市市史編さん委員会 1999『塩山市史 通史編 上巻』
塩山市社会科副読本作成委員会 1980『わたしたちの塩山市 新版』塩山市教育委員会
小林健二 2015「甲斐の古墳時代と土器-編年と移動を考える-」
『山梨県考古学協会誌 第23号 特集:移動を考える』山梨県考古学協会
特定非営利活動法人つなぐ 2011
『まちミュージアムガイドブック 甲州市塩山エリア編(菅田天神社、熊野神社、於曾屋敷、金山衆、塩山駅、雨宮敬次郎)』
山梨教育会東山梨支会 1916『東山梨郡誌』
山梨県 1998『山梨県史 資料編1 原始・古代1 考古(遺跡)』
山梨県 1999『山梨県史 資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)』
発掘調査報告書
甲州市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2016
『五反田遺跡-ナフコ甲州店建設に伴う発掘調査報告書-』甲州市文化財調査報告書 第17集
甲州市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2017
『大木戸・后畑遺跡-市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書-』甲州市文化財調査報告書 第24集
甲州市教育委員会・昭和測量株式会社 2017
『后畑西・ケカチ遺跡-市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書-』甲州市文化財調査報告書 第26集
甲州市教育委員会・昭和測量株式会社 2019
『塩部遺跡Ⅲ-学校法人駿台甲府学園駿台甲府中学校建設に伴う発掘調査報告書-』甲府市文化財調査報告 105
甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2019
『緑が丘二丁目遺跡-県道天神平甲府線道路改良に伴う発掘調査報告書-』甲府市文化財調査報告 104
甲府市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所 2022
『食糧工場遺跡-都市計画道路太田町蓬沢線外2路線街路事業に伴う発掘調査報告書-』甲府市文化財調査報告 124
韮崎市教育委員会 1988
『坂井南-山梨県韮崎市坂井南遺跡発掘調査報告書-』
山梨県教育委員会 1978
『西田遺跡-第1次発掘調査報告書-』
山梨県埋蔵文化財センター 1993
『東山比遺跡-第1~3次調査-』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第79集
山梨県埋蔵文化財センター 1996
『塩部遺跡-県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査報告書-』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第123集
山梨県埋蔵文化財センター 1997
『西田遺跡-第2次発掘調査報告書-』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第138集
山梨県埋蔵文化財センター 2003
『大木戸遺跡-国道411号(塩山東バイパス)建設工事に伴う発掘調査報告書-』山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第205集



調査区上空より北方の塩ノ山を望む



調査前風景（鉄塔左の林は熊野神社） 南西から



地名の由来である熊野神社（本殿・拝殿は重要文化財）



調査区から南へ約 400m地点を甲府盆地へ向け流下する重川



写真中央奥の自然堤防状微高地に西田遺跡は展開する 南から



全体完掘状況（オルソモザイク写真）



遺構検出状況（破線は第三次調査1区重複部） 北東から



完掘状況① 北東から



完掘状況② 北西から



完掘状況③ 南西から



完掘状況④ 南東から



S11 完掘状況 南西から



S12 完掘状況 北東から



S12 北側舌状突出部の土壌堆積状況 西から



S12_S11 (炉) 完掘状況 北西から



S12 遺物 (8: 壺) 出土状況 南西から



S13 完掘状況 北から



S13 土壌堆積状況 (東西ベルト) 南から

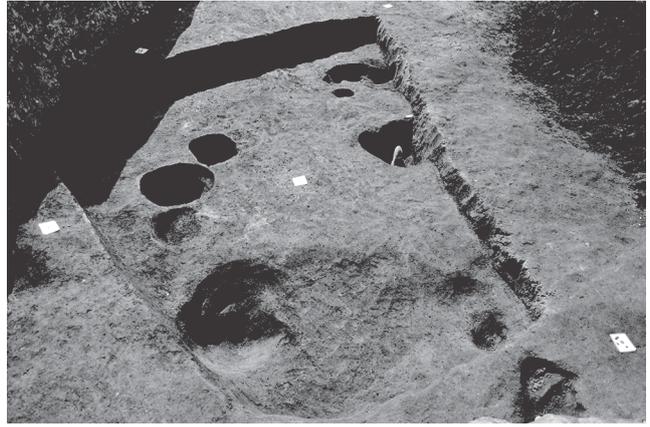


S13_SK1 遺物 (21: 高坏) 出土・土壌堆積状況 北から

図版 4



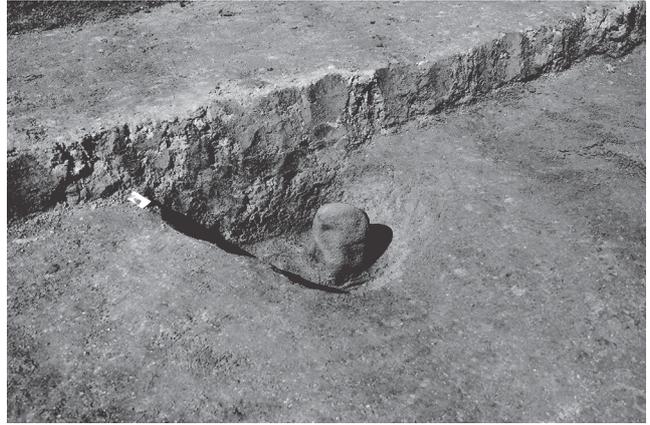
SX2 (竪穴住居) 完掘状況および土壌堆積状況 南東から



SI4 (第三次調査1区1号住居延伸部) 完掘状況 東から



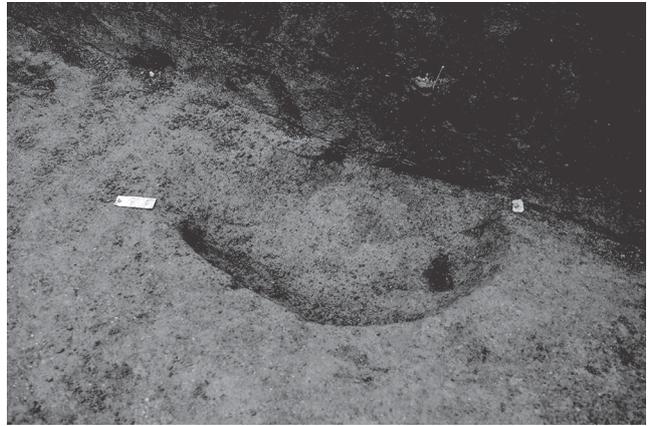
SI4 土壌堆積状況 西から



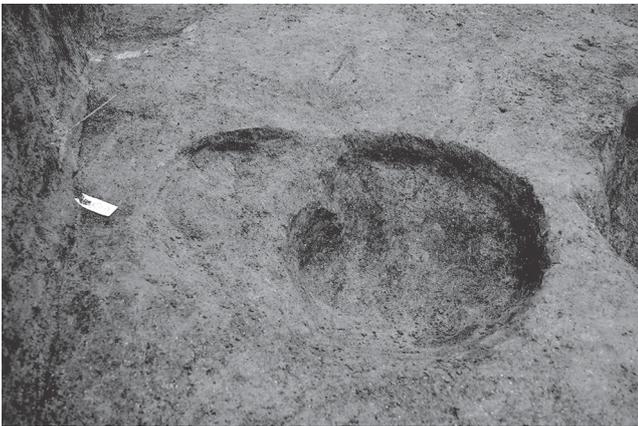
SI4_SK1 (炉) 完掘状況 南西から



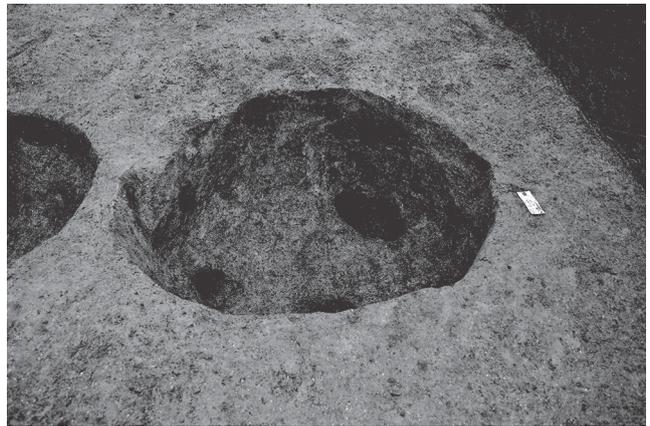
SI4 南東端遺物 (26:手捏ね土器) 出土状況 北西から



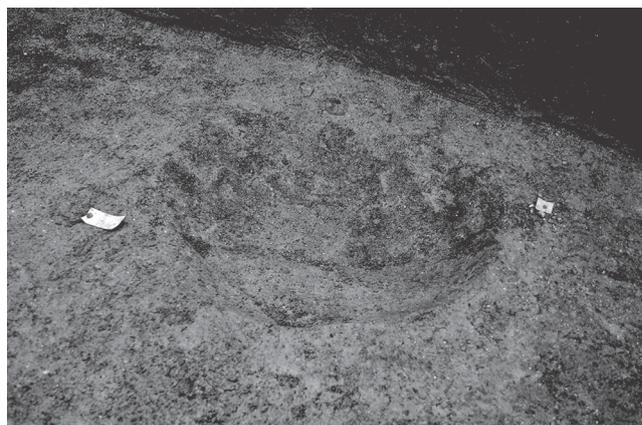
SK1 完掘状況 南西から



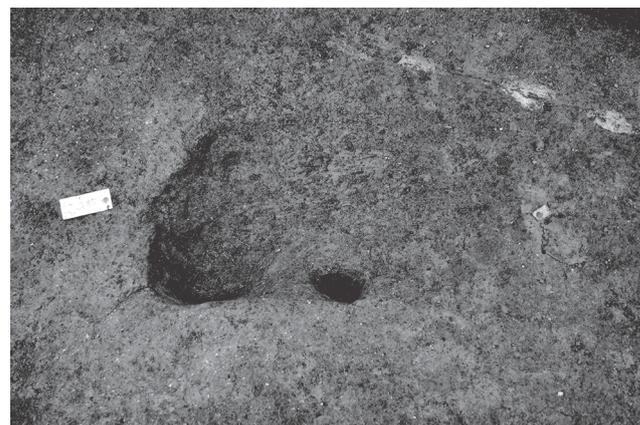
SK2 完掘状況 南から



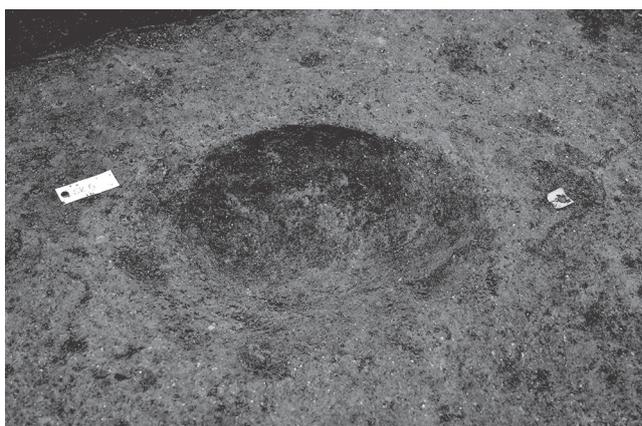
SK3 完掘状況 南から



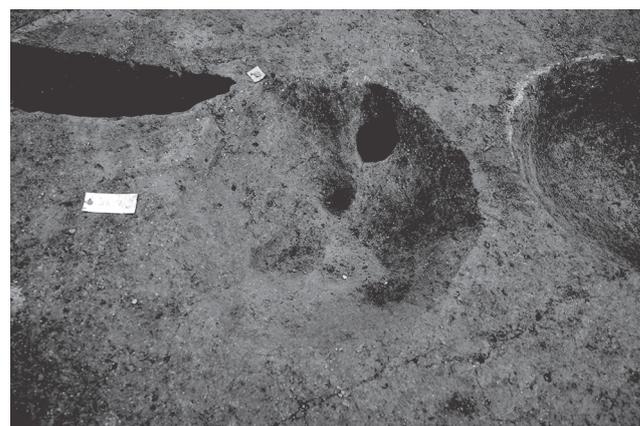
SK4 完掘状況 南西から



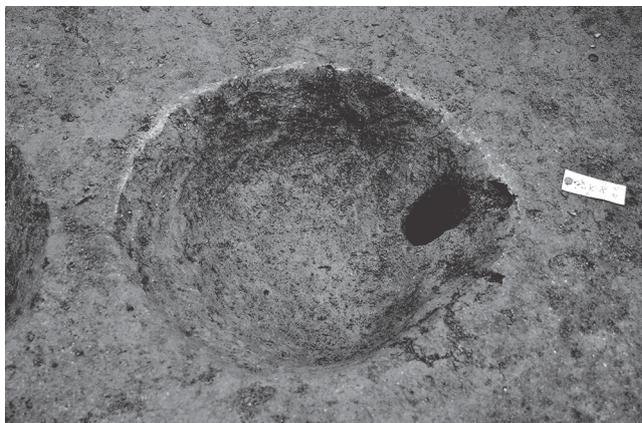
SK5 完掘状況 北東から



SK6 完掘状況 北西から



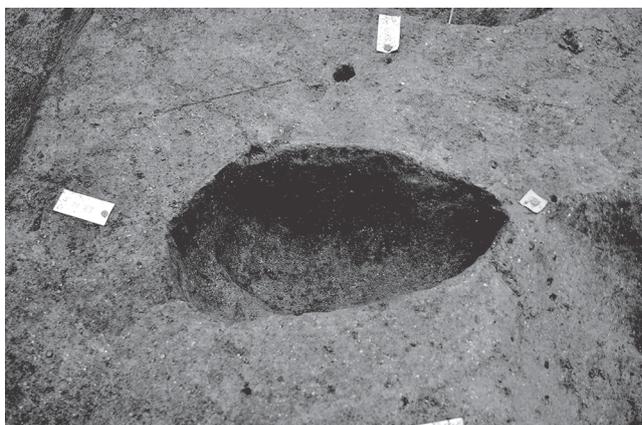
SK7 完掘状況 南から



SK8 完掘状況 南から



SK9 完掘状況 南から



SK10 完掘状況 西から

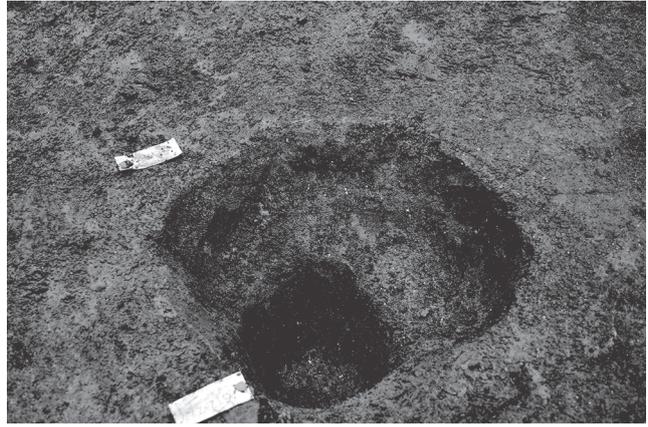


SK11 完掘状況 西から

図版6



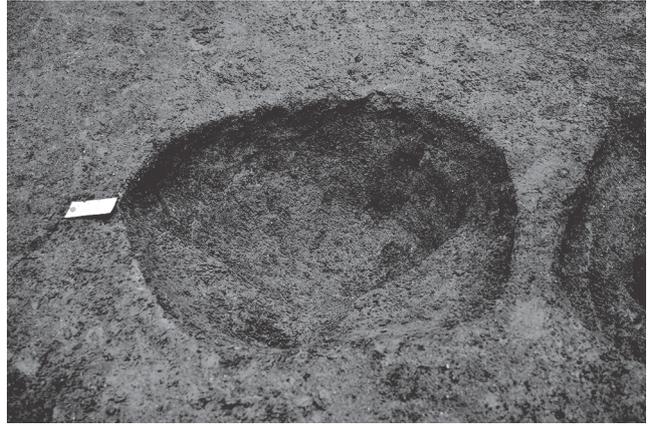
SK12 完掘状況 南西から



SK13 完掘状況 南西から



SK14 完掘状況 南西から



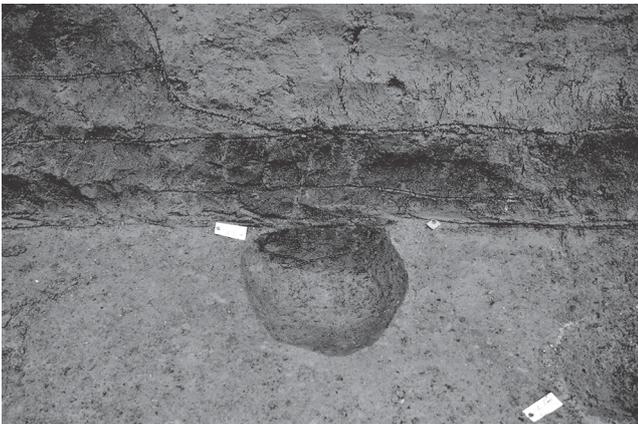
SK15 完掘状況 南から



SK16 完掘状況 南から



SK17 土壌堆積状況 東から



SK18 完掘状況 東から



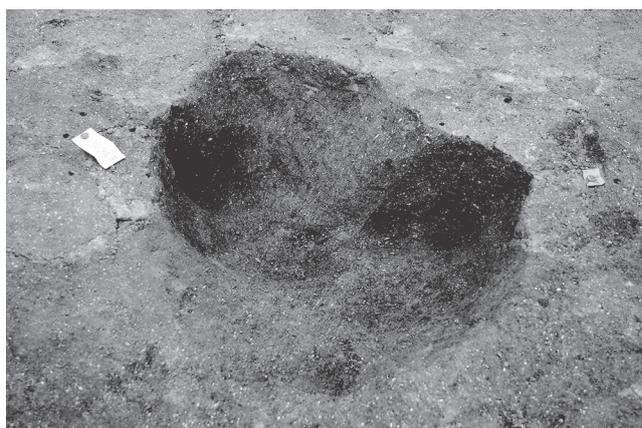
SK19 完掘状況 南から



SK21 完掘状況 東から



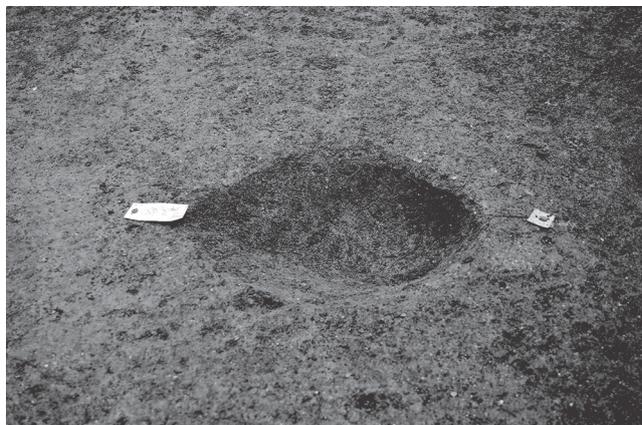
SK23 完掘状況 南東から



SK24 完掘状況 東から



SP1 完掘状況 南から



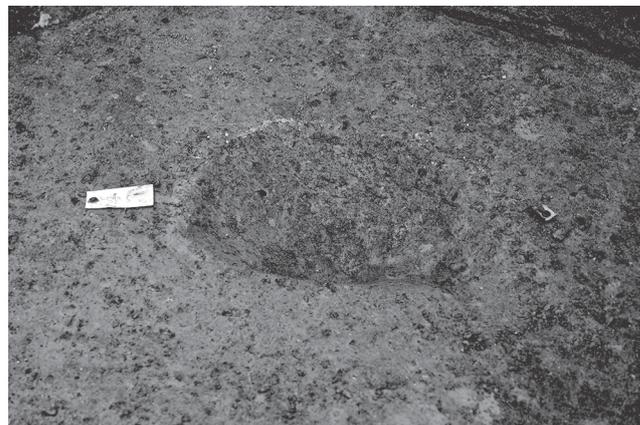
SP2 完掘状況 南から



SP3 完掘状況 東から

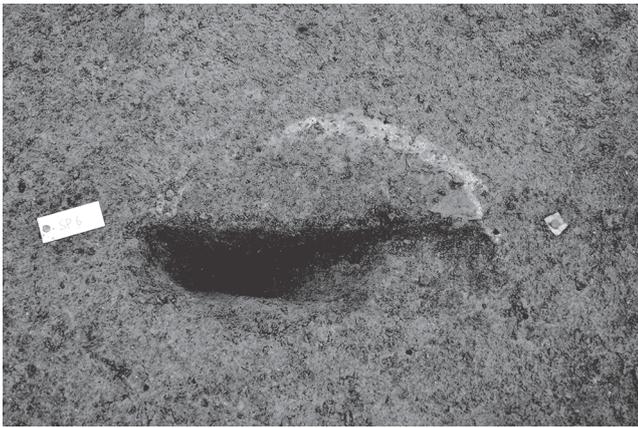


SP4 完掘状況 東から



SP5 完掘状況 東から

図版 8



SP6 土壌堆積状況 南から



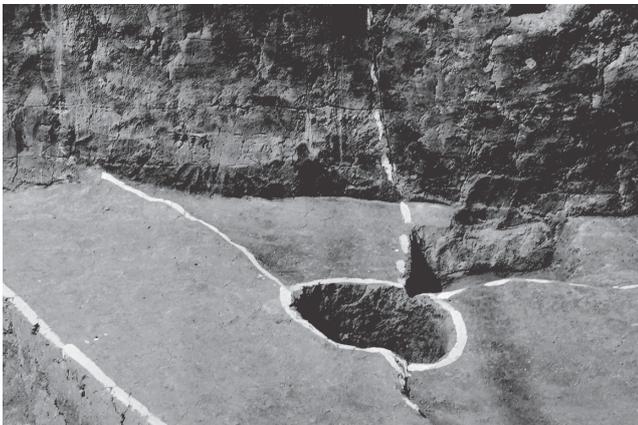
SP7 完掘状況 西から



SP8 完掘状況 北から



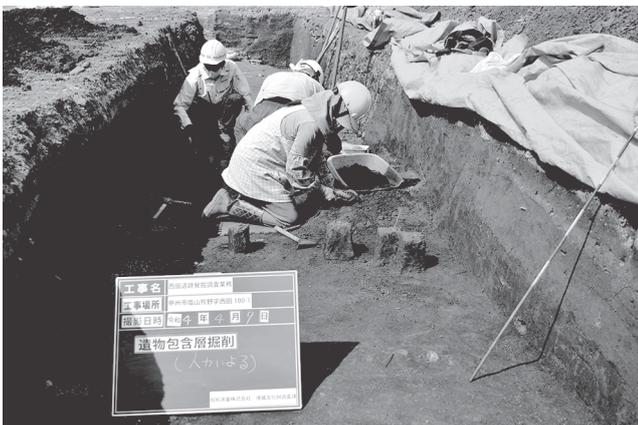
SP9 完掘状況 北から



SX1 完掘状況 南から



作業風景 重機による表土掘削



作業風景 人力による包含層掘削

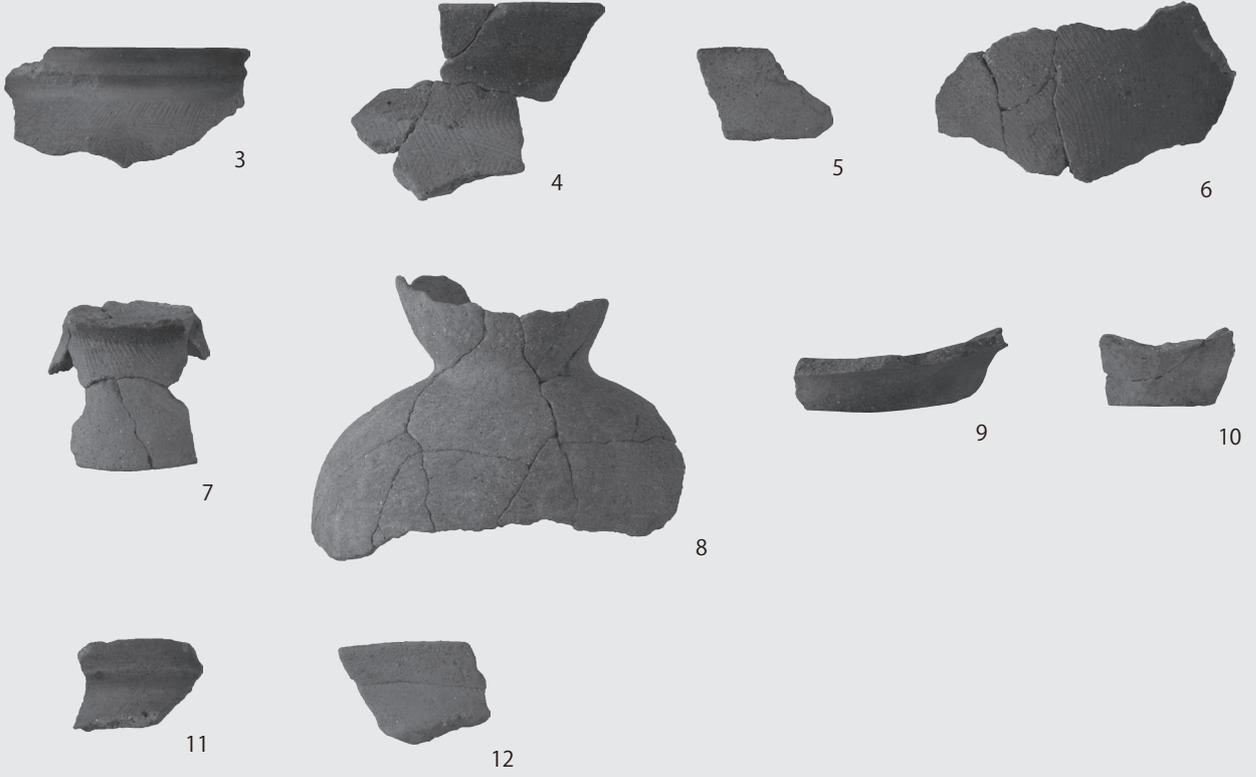


作業風景 電子平板図化システムによる計測

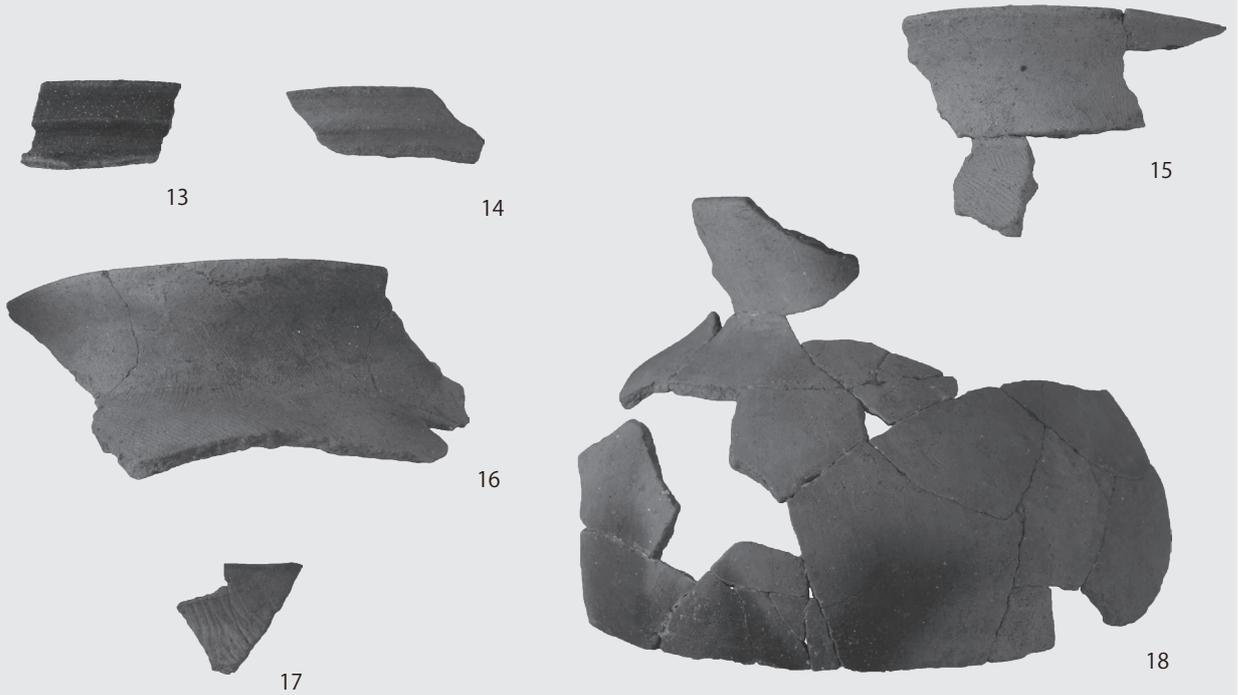
S11



S12



S13



SI3



19



20



21

SI4



22



23



24



25



26



27

SX1



28



29

SX2



30



31



32



33



34



35



36



37

SX2



38



39



40



41

SK3



42

SK21



43



44

SK24



45

遺構外一括



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55

報告書抄録

ふりがな	にしだいせき
書名	西田遺跡
副書名	ワークマンプラス塩山店建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編著者	望月健太・入江俊行
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448
発行年月日	2022(令和4)年9月30日

ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯東経				
にしだいせき	やまなしけんこうしゅうし えんざんくまのあざにしだ100-1	19213	塩6	35°41'22"	138°43'23"	20220405 ~20220510	約185㎡	店舗建設
西田遺跡	山梨県甲州市 塩山熊野字西田100-1							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西田遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居・土坑・小穴	土師器・手捏ね土器 石製品・縄文土器	第3次調査で部分検出した 竪穴住居の全容を確認し た。

要約	<p>甲州市南西端に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である西田遺跡の発掘調査（第4次）である。西田遺跡でこれまでに実施された調査のうち、特に昭和53年実施の第2次調査では竪穴住居54基を含む古墳時代前期の遺構・遺物群が確認されており、その調査成果は山梨県における古墳時代前期の集落内構造を解明するうえで重要な役割を持つ。</p> <p>今回の調査地は、西田遺跡の末端に位置するため遺構・遺物の密度は決して高くないが、竪穴住居5基、土坑22基、小穴9基に合わせ、性格不明遺構1基を検出した。竪穴住居からは地床炉や貯蔵穴、周溝等の施設を確認でき、炉や遺物等から古墳時代前期の住居といえる。また、性格不明遺構は部分的な検出であったため確認が得られるものではないが、その特徴から竪穴住居の可能性を十分に有するものである。</p> <p>土坑・小穴は調査区北西に集中する傾向にあるが、当該エリアは「口」字状調査区のうち掘削幅2m未満と特に狭小な一辺に位置するため、遺構間の位置関係を平面的に捉えることは適わない。しかし、形状・土層断面の観察から「柱穴」と性格付けできる遺構が確認できることから、事業地内に掘立柱建物が存在したことは確実といえる。</p>
----	--

甲州市文化財調査報告書 第34集

西田遺跡

ーワークマンプラス塩山店建設に伴う発掘調査報告書ー

2022(令和4)年9月30日 発行

編集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発行 株式会社ワークマン・甲州市教育委員会・昭和測量株式会社

印刷 株式会社内田印刷所